

超人ニコラ

江戸川乱歩

青空文庫

もうひとりの少年

東京の銀座に大きな店をもち、宝石王といわれている玉村^{たまむら}宝石店の主人、玉村^{ぎん}銀^{のす}之助^けさんのすまいは、渋谷区^{しぶや}のしずかなやしき町にありました。

玉村さんの家庭には、奥さんと、ふたりの子どもがあります。ねえさんは光子^{みつこ}といつて高校一年生、弟は銀^{ぎん}一^{いち}といつて中学一年生です。

あるとき、その玉村銀一君の身の上に、じつにふしぎなことがおこりました。それがこのお話の出発点になるのです。

その夜、玉村君は、松井君^{まつい}、吉田君^{よしだ}という、ふたりの友だちと、渋谷の大東^{だいとう}映画館で、日本ものスリラー映画を見ていました。

それは大東映画会社の東京撮影所で作られたもので、映画の中に、ときどき、東京の町があらわれるのです。

「あつ、渋谷駅だつ。ハチ公がいる。」

松井君が、おもわず口に出していいました。それはおっかけの場面で、にげる悪者、追

跡する刑事、カメラがそれをズーツとおつていくのですが、そこへ駅前の人通りがうつり、ハチ公の銅像も、画面にはいったのです。

「あらつ、玉村君、きみがいるよ。ほら、ハチ公のむこうに、やあ、へんな顔して、笑つてらあ。」

吉田君が、とんきような声をたてたので、まわりの観客が、みんなこちらをむいて、「シーツ。」といいました。

玉村君は、スクリーンの上の自分の姿を見て、へんな気がしました。ハチ公の銅像のうしろから、こちらをのぞいて、にやにや笑っている自分の顔、それが一メートルほどに、大きくうつっているのです。

それがうつつたのは、たった十秒ぐらいですが、たしかに自分の顔にちがいありません。玉村君は、ここにうつっているのは、いつのことだろうと考えてみました。

「おやつ、へんだな。ぼくは渋谷駅で、映画のロケーションなんか見たことは、一度もないぞ。」

いくら考えても、おもいだせません。知らないうちに、うつされてしまったのでしょうか。まさか、ロケーションに気づかないはずはありません。

そのぼんは、うちにかえって、ベッドにはいつてからも、それが気になって、なかなかねむれませんでした。

あれは、自分によく似た少年かもしれないとおもいましたが、しかし、あんなにそっくりの少年が、ほかにあろうとは考えられないではありませんか。

玉村君は、なんだか心配になってきました。自分とそっくりの人間が、どこかにいるとしたら、これはおそろしいことです。

それから一週間ほどたった、ある日のこと、玉村君の心配したことが、じつに気味のわるい形で、あらわれてきました。

玉村君と松井君とは、明智探偵事務所あけちの小林少年こばやしを団長とする、少年探偵団の団員でした。ですから、ふたりはたいへんなかよしで、どこかへいくときは、たいてい、いっしょでした。

その松井君が、ある日、学校がおわってから、玉村君をひきとめて、校庭のすみの土手にもたれて、へんなことをいいました。

「玉村君、ぼく、すっかり見ちゃったよ。きみは秘密をもっているだろう。」
「秘密なんかないよ。どうしてさ。」

玉村君は、ふしんらしく、聞きかえしました。

「きみのうちは、お金持ちだろう。お金持ちのくせに、スリなんかはたらくことはないじゃないか。」

「ますます、みようなことをいいます。」

「えっ、スリだって?」

「そうだよ。ぼくはすっかり見ちやっただよ。」

「ぼくがかい? ぼくがスリをやったって?」

玉村君はびつくりしてしまいました。

「ほら、八幡はちまんさまの石がき……。あの石がきの石が、一つだけ、ぬけるようになってるんだ。きみはその石のうしろに、からの紙入れを、たくさん、かくしたじゃないか。」

「なにをいっているんだ。ぼくにはちっともわからないね。もっとくわしく話してごらん。」

玉村君は、あまりのいいがかりに、腹がたって、おもわず、つよい声でいいました。

「じゃあ、くわしく話すよ。」

松井君は、ゆうべのできごとを、はなしはじめました。

スリ少年

きのうは八幡さまのお祭りでした。

こんもりした林にかこまれた、その八幡さまは、玉村君のうちからも、松井君のうちからも、そんなに遠くないところにありました。

ゆうべ、松井君は、ただひとりで、その八幡さまの中をブラブラしていたのです。

五千平方メートルほどの、八幡さまの境^{けいだい}内には、テントばりの見世物が二つと、オモチャ屋の店や、たべものの店が、いっぱいならんで、そのあいだを、おおぜいの人が、ゾロゾロ歩いていました。テントばりの見世物の一つは、おそろしく古めかしい「クマむすめ」という、かたわものを十円で見せているのです。

「クマむすめ」というのは、二十歳ぐらいのむすめの、肩のへんいちめんに、まっ黒な、クマのような毛がはえているのです。まるで、人間とクマのあいの子みたいなので、「クマむすめ」とよんでいるのです。

いまだきめずらしい見世物なので、おおぜいの見物人が、十円はらって、中へはいつて

いきます。

入口はテントの右のほう、出口は左のほうですが、松井君が見ていますと、その出口からゾロゾロと出てくる見物人の中に、玉村銀一君がまじっていたではありませんか。

「おやつ、玉村君は、こんなつまらない見世物を見たんだな。」

とおかしくなって、声をかけて、ひやかしてやろうと、そのほうへ、ちかづいていきました。そして、こちらへやってくる玉村君と、バツタリ、であつたのです。ふたりは二メートルほどの近さで、顔を見あわせたのです。

ところが、ふしぎなことに、玉村少年は、松井君を見ても、ニツコリともせず、知らん顔をして、すれちがつて、いつてしまふではありませんか。

「ははん。あいつ、はずかしがつているんだな。わざと、知らん顔をして、にげだしたんだな。よしつ、そんならこつちは、どこまでも尾行びこうしてやるぞ。」

少年探偵団で練習していますから、尾行はお手のものです。松井君は、玉村君にさくらぬように、あとをつけはじめました。

玉村君は、いつまでも八幡さまから出ないで、人ごみの中を、あちこちしています。わざと人だかりの中へ、もぐりこんでいくのです。そこを出ると、また、つぎの人だかりへ

めぐりこみます。玉村君は、よっぽど人ごみがすきらしいのです。

一時間ほど、そんなことをくりかえしていましたが、やっと人ごみにもあきたのか、玉村君は八幡さまを出て、外のくらい道をかえっていきます。

松井君は、あくまで尾行をつづけました。

玉村君は、八幡さまの外がわの長い石がきの半分ぐらいのところまでくると、そこで立ちどまって、キヨロキヨロと、あたりを見まわしました。だれか見ていやしないかと、気をくばっているらしいのです。

松井君は、すばやく電柱のかげに、身をかくしました。ほかに人通りもありませんので、玉村君は安心したように、石がきのそばによって、そこにしゃがんでしまいました。

そして、石がきの一つの石に手をかけると、グーツとひっぱりだしました。その石だけが、ぬけるようになっていたのです。

玉村君は石をぬきとったあとの穴に、手をいれて、なにかやっていますでしたが、また石をもとのとおりにはめこむと、そのまま、立ちあがって、むこうへ歩いていきます。

松井君は、あの石のおくに、なにかかくしたにちがないとおもいました。そこで、玉村君の尾行をあきらめて石のおくをしらべてみることにしました。

松井君は、あたりを見まわして、人通りがないのをたしかめると、石がきのそばによって、さっきの石に両手をかけ、グツとひっぱりました。石はなんの苦もなく、ズルズルとぬけてきます。

石をぬきとると、そのあとの穴に、手をいれて、さぐってみました。

ある、ある。一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、それはみんな紙入れや、がまぐちでした。あけてみると、どれも中はからっぽです。

松井君は、あきれかえってしまいました。玉村少年は、人ごみの中で、これらの紙入れや、がまぐちを、スリとつたのです。そして、中のお金をとりだして、からの紙入れなんかを、この石がきにかくしたのです。

ふつうなら、紙入れなんかは、どこかへすててしまうのですが、用心ぶかく、からの紙入れまでかくすというのは、よっぽどなれたやつです。スリの名人といってもいいでしょう。

ああ、親友の玉村銀一君が、スリの名人だったなんて。あまりのことに、松井君は、あいた口がふさがりません。

あのお金持ちの玉村君が、わずかのお金のために、スリをはたらくなんてまったく考え

られないことです。これにはなにか、わけがあるにちがいない。おもいきって、玉村君にきいてみよう。

松井君は、そう決心をしたので、校庭のすみで、きつきのように、玉村君を、といつめたのでした。

窓の顔

玉村君は、すこしもおぼえないことでした。

「ねえ、松井君、ぼくとまつたくおなじ顔のやつが、どつかにいるんだよ。あの映画のハチ公のそばに立っていたのも、けっしてぼくじゃない。また、きみの見たスリの少年も、むろん、ぼくじゃない。きみでさえ、まちがえるほど、ぼくとそっくりのやつが、いるのにちがいない。ぼくはなんだか、心配だよ。いまのところは、そいつは、ぼくとなんのかんけいもないけれども、そいつがなにかわるいことをして、その罪を、ぼくにきせようとするれば、きせられるんだからね。」

玉村君はそういつて、考えこんでしまいました。

「まさか……。」

松井君は、玉村君をげんきづけるようにいいました。が、心の中では、玉村君の心配は、むりではないとおもっているのです。

それから、しばらく話したあとで、ふたりはわかれて、それぞれのうちへかえりましたが、それは、学校がひけて、一時間もたったころでした。

玉村君がうちにかえってみますと、そこにはじつにおそろしいことが、まちかまえていたのです。

「ただいま。」といって、げんかん玄関にはいると、ちょうどそこに、ねえさんの光子さんが立っていました。

「あらっ、またかえってきたの？」

「えっ、またって？」

「だって、もうさつき学校からかえって、お部屋でおやつをたべたじゃありませんか。わたしがコーヒーとお菓子をもってつてあげたら、うまいうまいって、たべたじゃないの。いつのまに、外へ出ていったのよ。そして、学校の道具なんかもって、またかえってくるなんて、どうかしてるわ。」

それをきくと、玉村銀一君は、ゾーツとしました。

「ねえさん、ぼくをかつぐんじやないだろうね。」

銀一君は、しんけんな顔で、ねえさんをにらみつけました。

「おおこわい。なんてこわい顔するの？ 銀ちゃんをかついだって、しょうがないわ。たしかに、さつきかえったから、かえったっていうのよ。」

銀一君は、それにはこたえず、くつをぬぐのももどかしく、おそろしいいきおいで、自分の勉強部屋へ、かけていきました。

ドアをあけて、とびこんで見ると、ああ、やっぱり、そこには、机の上からになった菓子ざらとコーヒーの茶わんがのついていたではありませんか。

「あいつがきたのだ。そして、ぼくがかえったのを知ると、大いそぎで、窓からにげだしたのだ。」

ここからにげたといわぬばかりに、窓のガラス戸が、あけはなしになっていました。銀一君は、いそいで、窓の外をのぞきますと、その地面に、大きな足あとが、いくつものこっているではありませんか。

しらべてみると、本箱の本のおきかたが、かわっています。あいつが本を動かしたので

しよう。机のひきだしをあけてみると、どのひきだしも、みんな、あいつがいじつたらしく、紙などのかさねかたが、ちがっています。

じぶんとそっくりのやつが、うちへはいつてきて、おやつをたべたり、本箱や、机のひきだしを、かきまわしたかとおもうと、なんともいえない、いやあな気がしました。

すぐに茶の間へとんでいって、おかあさんに、このことを知らせましたが、あんまりへんなことなので、おかあさんも、どうしていいかわかりません。おとうさんが、お店からおかえりになったら、よく相談しようとおっしゃるばかりでした。

しばらくして、銀一君は、勉強部屋にかえって本を読んでいた。もう夕ぐれで、庭はうすぐらくなっています。おやつ、あれはなんでしょう。

本を読んでいる目のすみに、チラッと、動いたものがあります。窓の外でなにかが動いたのです。ハツとして、そのほうを見ると、さつきしめた窓ガラスに、自分の顔がうつつていました。

しかし、なんだか角度がへんです。あんなところに、ぼくの顔がうつるかしら……あつ、もしかしたら！ 銀一君はギョツとして立ちあがると、窓ガラスへ近づいていきました。やっぱりそうでした。ガラスにうつっているのではなくて、ガラスのむこうがわに、自

分の顔があるのです。自分の顔ではない、自分とそっくりのやつが、ガラスの外から、のぞいていたのです。

十秒ほど、ガラスをへだてて、まったくおなじ二つの顔が、じつとにらみあっていました。じつに、なんともいえない、へんてこな光景でした。

ニコラ博士

十秒ほどにらみあったあとで、窓のむこうの顔は、パツとガラスをはなれて、庭の立ち木のあいだに、にげこんでしまいました。

銀一君は、少年探偵団員だけあって、こういうときには勇かんです。うちの人に知らせるひまもないので、そのまま、窓からとびだすと、くつもはかないで、自分とそっくりの少年のあとを、おいました。

あいては、うらのコンクリートべいを、よじのぼって、外の道路へ、とびおりたようです。銀一君も、そのへいをのりこえました。

見ると、二十メートルほどさきを、あいつが大いそぎで、あるいていきます。うしろ姿

は、銀一君と、まったくおなじ服装です。

こちらは、しずかに、へいからすべりおちて、追跡をはじめました。ほとんどぐらくなっているのです、あいてにさとられる心配はありません。

それにしても、なんとというふしぎな追跡でしょう。まったくおなじ顔の、おなじ服装の、ふたりの少年が、二―三十メートルをへだてて、トット、トットと、いそぎ足に、歩いているのです。

さびしい町から、さびしい町と、あるいているうちに、いつのまにか、あの八幡さまの石がきのところにきていました。

あいての少年は、石がきをとおりすぎて、八幡さまの林の中へはいつていきます。ゆうべでお祭りはすんだので、林の中はまつくらで、人つ子ひとりいません。

銀一君も、すしおくれて、八幡さまの中へ、はいつていきましたが、くらいので、なにがなんだかわかりません。あの少年はどこへいったのか、いくらさがしても姿が見えないのです。

むこうにブーツとひかつたものがあります。八幡さまの社しゃ殿でんの前に、うすぐらい常じょう夜灯やとうが立っているのです。

その社殿のえんがわのようなところに、みような人間が、こしかけていました。はでなしまの背広をきた老人です。

老人は白いかみの毛をモジャモジャにして、長い白ひげを胸の前にたらしめています。大きなめがねをかけていて、それが常夜灯の光を反射して、キラキラひかっているのです。こんなまつくらな中で、社殿にこしかけているなんて、あやしい老人です。銀一君は、気味がわるくなつて、にげだそうかと思いましたが、にげるのもざんねんです。勇気をだして、ぎやくに、こちらからちかづいていきました。

「おじいさん、ぼくとおんなじ服をきた、おんなじ顔の子どもが、ここをとおらなかつたですか。」

おもいきつて、はなしかけてみました。すると、老人は、こしかけたまま、身動きもしないで、にやりと笑いました。

「おお、かんしん、かんしん、きみはなかなか勇氣がある。きみとおんなじ顔をした子ども、あれはきみの分身じゃよ。」

地の底から、ひびいてくるような、いんきな声です。

「分身つて、なんですか？」

「きみが、ふたりになったのじゃ。ひとりの子どもが、ふたりにわかれたんじゃよ。」

「どうして、そんなことができるのですか。」

「わしがそうしたのじゃよ。ハハハハハハ。」

老人はぶきみに笑いました。やっぱり、あやしいやつです。

「おじいさんはだれですか。」

「わしはニコラ博士というものじゃ。」

「ニコラ博士？　じゃあ、日本人ではないのですか。」

「わしは十九世紀のなかごろに、ドイツで生まれた。だが、わしはドイツ人ではない。世界人じゃ。イギリスにも、フランスにも、ロシアにも、中国にも、アメリカにもいたことがある。そして、いたるところで、ふしぎをあらわして歩くのじゃ。わしは大魔術師じゃ、スーパーマンじゃ。わしにできないことはなにもない。神通力しんつうりきをもっているのじゃ。わしひとりの力で、この世界を、まったくちがったものにすることができる。そういう神通力をな。ウフフフフ。」

老人はそういって、またしても、地の底からのような、いんきな声で、笑うのでした。

地底の牢獄ろうじく

「十九世紀のなかばというと、一八五〇年ごろですね。」

銀一君は、びつくりして、聞きかえました。

「そうじゃ。わしが生まれたのは一八四八年だよ。」

銀一君は、しばらく、指をおつて、かぞえていましたが、あつとおどろいて、おもわず大きな声を出しました。

「じゃあ、おじいさんは、百十四歳ですね。」

「ウフフフフ、おどろくことはない。わしは、これからまだ、百年も二百年も生きるつもりじゃよ。わしは、あたりまえの人間ではない。スーパーマンだ。魔法つかいだ。」

さて、玉村銀一君。これから、わしがおもしろいところに、つれて行ってやる。そこにいけば、どうして、きみとそっくりの少年が、あらわれたか、その秘密が、わかるのじゃよ。さあ、わしといっしょに、くるがいい。」

怪老人ニコラ博士は、ちゃんと銀一君の名まえを知っていました。玉村家にたいして、なにかおそろしいことを、たくらんでいるのかもしれない。

ニコラ博士は、社殿のえんがわからおりと、銀一君の手をとって神社のうらてのほうへ、歩いていきました。

森を出はずれると、さびしい、広い道があつて、そこに、りっぱな自動車がとまっています。

銀一君は、こんな自動車で、どこへつれていかれるかわからないと思うと、こわくなってきました。

「ぼく、うちにかえりません。」

そういうと、いきなり、にぎられていた手を、ふりはなして、にげだそうとしました。

「どっこい、そうはいかないぞ。きみはもう、わしのとりこなのじゃ。」

白ひげのニコラ博士は、すばやく銀一君をつかまえて、自動車の中におしこもうとしました。

そこで百十四歳の老人と、十三歳の少年との、ふしぎなとつくりあいが、はじまったのです。ふつうならば、百歳をこえた老人のほうが、まけてしまうはずですが、ちようじん超人ニコラ博士は、おそろしくつよくて、銀一君は、とても勝てないのです。

ニコラ博士は、銀一君を、身動きもできないように、だきしめて、ポケットから、大き

なハンカチをとりだし、それをまるめて、銀一君の口の中におしこみました。

もう声をたてることもできません。そのまま自動車の中に、おしこまれてしまいました。すると、ハンドルをにぎって、まちかまえていた運転手が、すぐに車を出発させるのでした。

二十分ほど走ると、さびしい町の、石のへいにかこまれた洋館の前につきました。

ニコラ博士は、銀一君の手をひっぱって、その門の中にはいつていきます。まるで鉄のようにつよい手です。とてもにげることはできません。

洋館にはいると、広い廊下をとおって、地下室への階段をおりていきました。

地下室は、三十平方メートルほどの物置部屋です。ふるいいすやテーブルや、いろいろな木の箱などが、ゴタゴタと積みかさねてあります。

「ここは、あたりまえの物置きじや。地下室は、これでおしまいのように見えるじやろう。ところが、このおくに、秘密の部屋があるのじや。まさか地下室のおくに、もうひとつ地下室があるなんて、だれも考えないからね。たとえ、家^やさがしをされても、だいじょうぶなのだ。ほら、ここに秘密のドアがある。」

ニコラ博士は、そういつて、コンクリートの壁^{かべ}の、かくしボタンをおしました。すると、

目の前の壁が、スーッと、音もなく、むこうにひらいて行って、そこに、四角な穴ができました。

その穴をくぐって、廊下のようなところをすこしいきますと、両がわに、鉄棒のはまつた、動物園のおりのような部屋がならんでいました。

ニコラ博士は銀一君の口から、ハンカチのさるぐつわを、とりだしてから、そのおりのような部屋のドアをかぎでひらいて、銀一君を中におしこみ、ドアをしめて、またかぎをかけてしまいました。

「ここで、ゆつくりしているがいい。ベッドもあるし、便器もおいてある。食事も、なるべくおいしいものを三度三度、はこぼせるよ。じゃあ、またくるからね。」

ニコラ博士は、そういうのこして、どこかへたちさつてしまいました。

地底の牢獄です。銀一君は、おそろしいとりこになってしまったのです。いつになったら、ここを出られるのでしょうか。ひよつとしたら、一生がい、出られないのではないのでしょうか。

「おい、きみ、おい、きみ。」

どこからか、人の声がきこえてきました。前の廊下の、むこうからのようです。

銀一君は、おりの鉄棒につかまって、そのほうを見ました。廊下のでんじょうに、うすぐらい電灯がついているだけですから、おりの中は、ぼんやりとしか見えません。むこうがわのおりの中に、なにか動いているものがあります。

じつと見つめていますと、だんだん目がなれて、その姿が、はつきりしてきました。それは、銀一君よりは二つ三つ年上らしい少年でした。

「おい、きみ、わかるかい。ぼくだよ。きみもぼくと、おんなじめに、あつたらしいね。きみのかえ玉が、きみのうちにはいり、ほんもののきみは、ここにとじこめられたんだらう。」

「そうですよ。きみもそうなんですか。」

「うん、ぼくのうちには、いま、ぼくのかえ玉がいるんだ。おとうさんも、おかあさんも、かえ玉とは気がつかない。それほど、ぼくとそっくりなんだ。ニコラ博士は、おそろしいスーパーマンだよ。人間の顔を、どんなにでも、かえることができるんだ。ぼくとそっくりの人間をつくることもできるし、また、ぼくを、まるでちがった顔に、かえてしまうことだってできるんだ。で、きみは、なんていうの？ きみのうちは、なにをやってるの？」

「ぼく、玉村銀一。おとうさんは玉村宝石店をやっているのです。」

「あつ、そうか。あの有名な宝石王だね。ぼくは白井保^{しろいたもつ}。ぼくのうちは、銀座の白井美術店だよ。」

「知ってます。あの大きな美術店でしよう、仏像やなんか、たくさんおいてある。」

「そうだよ。きみ、わかるかい。ニコラ博士は、宝石や美術品をねらっているんだぜ。そして、まず、ぼくたちのかえ玉をつくって、人間の入れかえをやったんだ。このつぎに、あいつがなにをやるか、ぼくには、わかっているよ。ああ、おそろしいことだ。はやくだれかに知らせなければ、とりかえしのつかないことになる。」

白井保少年は、おりの鉄棒にしがみついて、じだんだをふまんばかりでした。

こじきむすめ

それから二日ほどのちの午後、玉村さんのうちでは、おとうさんの銀之助さんは銀座のお店へ、おかあさんは麴^{こうじまち}町の親類へおでかけになって、高校一年の光子さんと、銀一君のふたりが、書生さんや、女中さんたちといっしょに、おるす番をしていました。

光子さんと銀一君は光子さんの部屋で、おやつのお菓子をたべおわったところです。

「おねえさん、それじゃあ、ぼく、じぶんの部屋で、宿題をやるからね。」

銀一君は、そういつて、部屋を出ていきました。なんだか、へんですね。銀一君は、あの地底の牢獄から、にげだしてきたのでしょうか。そんなにやすやすと、にげられるはずはありません。

ひよつとしたら、いまうちにいる銀一君は、にせもののほうではないのでしょうか。まったくおなじ顔をしているので、おとうさんも、おかあさんも、おねえさんも、すっかりだまされてしまつて、にせものを、ほんとうの銀一君と、しんじているのではないのでしょうか。

銀一君がいつてしまうと、光子さんは、机の前のいすにかけたまま、窓のほうをむいて、広い庭を、ながめていました。

すると、庭の木のしげみのおくから、みような人間が、あらわれてきたではありませんか。

女のこじきです。年は光子さんとおなじ十六ぐらいに見えます。かみの毛はモジャモジャになって、ひたいにかぶさり、服はボロボロにやぶけて、肩から、腰から、たくさんのひもがぶらさがっているように見えます。それに、くつ下も、くつもはかない、どろまみ

れの足です。

そのこじきむすめが、じつと光子さんを見つめて、こちらにちかづいてくるのです。

ふつうのむすめさんなら、こんなものを見たら、おくへにげこんでしまったでしょうが、光子さんは、にげません。光子さんは、たいへん、なさけぶかいたちで、かわいいそう人を見ると、だまっってはいられないのです。

あるとき、道ばたにすわっている、おばあさんのこじきを見ると、つくったばかりの外とうをぬいで、そのこじきにきせかけたまま、さっさとかえってきたことがあります。

また、あるときは、子どものこじきを、自動車の中にひろいあげて、うちにつれてかえり、おかあさんに、そのこじきの子を、うちにおいてくださいと、たのんだこともありません。

光子さんは、そんなふうには、なみはずれた、なさけぶかいたち心をもったおじょうさんでした。

ですから、庭にあらわれた、こじきむすめを見ても、にげだすどころか、ちかづいてきたら、なにかしんせつなことをかけてやろうと、じつとまちかまえているのです。

こじきは、やがて、窓の下までくると、そこに立ったまま、ジロジロと光子さんをなが

めながら、みかけによらぬ、きれいな声でいいました。

「おじょうさん、なぜにげないの？ あたしがこわくないの？」

光子さんは、それをきくと、この子はひがんでいるのだ、だから、こんな、ひにくなことをいうのだと、かなしく思いました。そこで、できるだけ、やさしい声で、たずねてみました。

「あんた、どこから、はいつてきたの？」

「門からよ。だつて、ねるところがなければ、どこにだつて、はいるわ。ゆうべは、お庭のすみの物置小屋でねたの。」

あんがい、ちゃんとしたことばをつかっている。このむすめは、生まれつきのこじきではないらしいと、光子さんは考えました。

「おなかですいているんでしょう。あんた、おとうさんや、おかあさんは？」

「なんにもないの。みなし子よ。そして、おなかのほうは、おさっしのとおり、ペコペコだわ。」

「じゃあね。人に知れるといけないから、この窓から、はいつていらっしやい。いま、わたしが、なにか、たべるもの、さがしてきてあげるわ。」

「だれも、きやしない？」

「だいじょうぶよ。このうちには、いま、わたしと弟きりで、あとは書生や女中さんばかりよ。この部屋には、だれもこないわ。」

それをきくと、こじきむすめは、窓をのりこえて、はいつてきました。光子さんは、こじきをいすにかけさせておいて、部屋を出ていきましたが、やがて、クツキーの칸と、牛乳のびんを二つと、コップをもって、かえつてくると、それをこじきの前のテーブルにおき、

「さあ、おあがりなさい。」
とすすめるのでした。

こじきは、よつぽど、おなかがすいていたとみえて、クツキーをわしづかみにして、口にはおぼりましたが、そのとき、ひたいにたれていたかみの毛を、うるさそうにかきあげたので、はじめで、こじきの顔が、はつきり見えました。

ああ、なんて美しいこじきでしょう。きたない服にひきかえて、顔だけは、すこしもよごれていないのです。色白のふつくらとしたほお、パツチリとした、美しい目、赤いくちびる。

「まあ、あんた……。」

光子さんは、さげぶようにいつて、思わず立ちあがると、ドアのほうへ、にげだしそうにしました。

光子さんは、ひどくおどろいたのです。こじきが、美しい顔をしていたためばかりではありません。もつと、びつくりすることがあったのです。

すると、こじきむすめは、ニツコリ笑って、

「ああ、うれしい。おじょうさんにも、やつぱり、そう見えるの？ あたし、ほんとうにうれしいわ。こんなきたないこじきの子が、このりっぱなおやしきのおじょうさんと、そつくりだなんて。」

ほんとうに、そつくりでした。一方は、ちゃんといたかみの毛、きれいな服、一方はモジャモジャ頭、ボロボロの服、そのちがいをべつにすると、ふたりは、背の高さから、肉づきから、顔かたちまで、まるでふたごのように、おそろしいほど、よくにているのです。

「あたし、もうずっと前から、おじょうさんと、あたしと、ふたごのように、よくにていることを知っていました。もし、あのおじょうさんと、ひとことでも、お話ができればと、

もうそれが、あたしの、一生ののぞみだったのです。いま、そののぞみがなくなって、あたし、こんなうれしいことはありませんわ。」

こじきむすめは涙ぐんでいました。

「まあ、こんなふしぎなことつて、あるもんでしょうか。」

光子さんは、それまでよりも、十倍も、なさけぶかい心になって、ため息をつきながらいうのでした。

まるでたちばのちがう、このふたりのむすめは、たちまち、きょうだいのように、なかよしになってしまいました。

光子さんがたずねますと、こじきむすめは、あわれな身のうえ話をしました。光子さんは、涙をこぼして、それをきいていましたが、話しているうちに、ふたりは、顔ばかりでなく、^{きしつ}気質まで、よくにていることが、わかってきました。

しめっぽい身のうえ話がすむと、ふたりは、だんだん快活^{かいかつ}になって、笑い声をたてながら、話しあっていました。やがて、光子さんは、こんなことをいいますのでした。

「ああ、いいことを思いついたわ。まあ、すてきだわ。ねえ、あんた、わたし、いま、それはおもしろい遊びを考えついたのよ。」

「あら、おじょうさんと、あたしとが、なにかしてあそぶんですの？」

こじきむすめは、びっくりして、ききかえします。

「ええ、そうよ。わたしね。子どものとき『乞食王子』って本を、よんだことがあるの。それで思いついたのよ。あのね、わたしがあんたになるの。そして、あんたがわたしになるの。わかって？ つまりね、あんとわたしが、服やなんか、すっかり、とりかえてしまふのよ。ふたりは、顔がおんなじでしょう。だから、服をかえて、かみの毛のくせをかえれば、あんたがわたしになり、わたしがあんたになれるのよ。」

この思いつきも、半分は光子さんのなさけぶかい心から出ているのでした。かわいいそんなこじきむすめに、ひとときでも、宝石王の令嬢になった夢を見せてやりたいと思ったのです。

「まあ、あたしと、おじょうさんと、いれかわるの？ ワー、すてき。あたしに、そのきれいな服をきせてくださるのね。」

こじきむすめは、もうむちゆうになっていました。

光子さんは、洗面器にお湯をいれて、てぬぐいと、足ふきをもってきて、まず、こじきの顔や手を、それから足を、きれいにふいてやりました。そして、かみの毛を、ていねい

になでつけてやり、服をとりかえました。

きたないこじきむすめが、たちまち、美しいおじょうさんにかわってしまいました。

光子さんは、こじきを三面鏡の前に、つれていきました。

「どう、さつきまでのわたしと、そっくりでしょう。」

「ワーツ、これがあたし？　ほんとかしら……。」

こじきむすめは、そういつて、じぶんのほおをつねってみるのです。

つぎは光子さんの番でした。きたないボロボロの服をきて、かみの毛を、指でかきまわして、モジャモジャにして、鏡をのぞきこみました。

「あら、そんな美しいこじきつて、ないわ。顔に、まゆずみを、うすくぬってあげましょうか。そうすれば、ほんとうのこじきに見えるわ。」

こじきむすめは、ちようしにのつて、そんなことまでいいだしましたが、光子さんは、かえっておもしろがつて、学校の仮装会かそうかいのことを思いだしながら、こじきむすめというままだに、顔いちめん、まゆずみをぬらせるのです。

人間いれかえ

「こつちへいらつしやい。ふたりならんで、鏡の前に立ってみるのよ。」

こじき姿の光子さんが、光子さんの服をきたこじきむすめの手をとって、鏡の前につれてきました。

「あらつ、あんた、あたしとそつくりだわ。そして、あたしは、あんたとそつくりね。だれにも見わけられないわ。」

「わたし、うれしいですわ。こんなきれいなおじようさんになれたんですもの。でも、いけませんわ。だれかに見られるとたいへんですわ。はやく服をとりかえましょうよ。」

「なあに、いいのよ。みんなをびつくりさせてやりたいわ。ね、あんた、もつとぐつとおすましましてね、あちらへいって、書生や女中に、なにかいってごらん。お紅茶をもつてくるようにいいつけてもいいわ。そして、だれにもうたがわれないで、ここにかえってきたら、そうね、なにかごほうびをあげるわ。おこづかいをあげてもいいわ。」

光子さんは、このいたずらが、たのしくてたまらないという、顔つきです。

「だって、わたし、こわいわ。きつとみつかりますわ。」

光子さんとそつくりのこじきむすめは、なかなか決心がつかないらしいのです。

「みつかるもんですか。ほら、鏡をごらんさない。ね、あんた、あたしとそっくりだわ。だいじょうぶよ。さあ、いつていらつしやい！」

光子さんは、そういつて、こじきむすめを、ドアのところにつれていくと、グツと、廊下に、おしだしてしまいました。にせものの光子さんは、しかたなく、廊下を歩いていきます。

一つかどをまがると、むこうから書生がやってくるのに、パツタリであいきました。こじきむすめは、びつくりして、にげだしたでしょうか。

いや、いや、そのとき、じつにおそろしいことがおこったのです。ほんとうの光子さんが、まるで考えてもいなかったことが、おこったのです。こじきむすめは、いきなり、書生のそばにかけやりました。そして、こんなことをさげんだのです。

「はやくきて！ たいへんなのよ。あたしの部屋に、こじきの子が、はいつているのよ。はやく、あれをおいだしておくれ。」

光子さんになりました。こじきむすめが、とほうもないことを、いいたしたのです。書生は、すこしもうたがわず、このことばをまにうけてしまいました。

「えっ、こじきが？ おじょうさんのお部屋に？ とんでもないやつだ。ここにまっついで

らつしやい。すぐにつかみだしてやりますから。」

書生は、いきなり、かけだして、光子さんの部屋に行ってみますと、黒い顔をした、きたないこじきが、鏡の前にこしかけて、じぶんの顔をうつししながら、にやにや笑っているではありませんか。

「こらつ、きさま、どうしてここにはいつてきたんだ。はやく出ていけ。ぐずぐずしていると、警察にひきわたすぞつ。」

いくらどなつても、あいては、へいきな顔をして、こんなことをいうのです。

「あらつ、なにをそんなにおこっているの？ ちよつといたずらをしてみたのよ。おこることはないわ。」

書生は、光子さんのことばのいみを、とりちがえました。

「ばかつ、ちよつといたずらに、部屋の中にはいられてたまるかつ。さあ出ろ。出なければ、こらつしてやるぞつ。」

書生は、こじきむすめ（ほんとうの光子さん）の首すじをつかんで、窓のそばにつれていき、いきなり、窓の外に、つきおとしてしまいました。

こじきむすめは、窓の下にころがって、からだじゅう、砂まみれになりました。

「青木^{あおき}つ、なにをするの。あたしをだれだと思っているの。」

光子さんは、やっとおきあがると、窓からのぞいている書生に、せいっぱいの声で、どなりつけました。青木というのは、書生の名です。

「なまいきいうなつ。だれとも思っていない。こじきだと思っているよ。さっさと出ていけ。出ていかないと、もつと、いたいめをみせてやるぞつ。」

書生は、いまにも、窓からとびだしてきそうないきおいです。

光子さんは、ただどなっていたつてしかたがない、わけをはなそうと思いました。

「ねえ、青木さん。あんたが思いちがいをするのも、むりはないわ。でもあたしは光子なのよ。庭からはいつてきた、こじきむすめと、服のとりかえっこをしたのよ。」

それをきくと、書生は、声をたてて笑いました。

「アハハハハハ、なにをつまらないことをいつている。あつ、ちようどいい、光子さんがこられた。ねえ、おじょうさん、こいつ、あなたと服をとりかえたんだといつてますよ。」

すると、窓に、二つの顔があらわれました。にせの光子さんと、それから、弟の銀一君です。

「あつ、あんた、そこにいたの。はやく、あたしをたすけてちょうだい。あんたがあたしの服をきて、あたしがあんたの服をきているんだわね。」

それをきくと、光子さんにばけたこじきむすめは、目をまんまるにして、わざとおどろいてみせるのです。

「まあ、おそろしい。なんといういいがかりをつけるのでしょうか。そんなばかなことを、だれが信用するものですか。青木さん、はやくこのこじきを、門の外へ、ほうりだして。」

こじき姿の光子さんは、びつくりしてしまいました。

「あらつ、なにをいうの。あんたこそ、おそろしい人だわ。ねえ、銀ちゃん、あんたはわかつてくれるわね。ほら、おねえさんの光子よ。」

弟の銀一君によびかけて、顔を窓のほうへつきだしましたが、銀一君も、とりあつてくれません。

「光子ねえさんはここにいるよ。そんなきたないねえさんなんてあるもんか。おまえなんか、はやく、どつかへいつちまえつ。」

たのみの綱つなが、きれはてました。

ああ、とんだことをしてしまった。あんな気まぐれをおこして、服のとりかえっこをし

たばつかりに、おそろしいめにあわなければならぬ。光子さんは後悔しましたが、いまさらおっつきません。

あつ、書生がえんがわからまわつて、庭に出てきました。おそろしい顔をしています。

「さあ、門の外にでるんだ。そして、おまえのこじき小屋にかえるんだ。」

そういつて光子さんのえり首をつかむと、グングン門のほうへおしていくのです。

おとうさんは銀座のお店です。おかあさんは麴町の親戚におでかけです。もうたすけをもとめる人もありません。

それにしても、弟の銀一が、どうして、あたしを見わけてくれなかったのだろうか、光子さんはふしぎに思いました。

しかし、読者諸君はごぞんじです。これは銀一君とそっくりの顔をした、にせものです。ほんとうの銀一君は、ニコラ博士という白ひげのじいさんにつれていかれ、地下室にとじこめられているのです。

ああ、これはどうしたことでしょう。怪人ニコラ博士は、いったい、なにをたくらんでいるのでしょうか。まず銀一君をにせものといれかえ、いまはまた、光子さんをいれかえたのです。おそろしい計画は、つぎつぎと、なしとげられていくようにみえます。

「さあ、はやく、あっちへいけっ。」

書生は、門の鉄のとびらをひらいて、光子さんを外につきとぼし、そのまま、パタンととびらをしめて、うちにはいつてしまいました。

人形紳士

光子さんは、書生につきとぼされたとき、ひざを強くうったので、いたさに、そこにうつぶしたまま、シクシクと泣いていました。

ああ、「乞食王子」のまねなんかしなければよかった。あんな小説をおぼえていたばかりに、とんだことになってしまった。あたしは、どうすればいいんだろう。

くよくよと、おなじことを、くりかえし、考えているうちに、ふと気がつくど、なにがおしりをつつくものがあります。

おどろいて、うつむいていた顔をあげてみますと、いつのまにか、六人ほどの子どもたちにとりかこまれていました。

近くのいたずら小僧どもが、きたないこじきむすめがたおれているのを見て、あつまっ

てきたのです。その中のひとりが棒きれをもって、光子さんのおしりをつつついたのです。光子さんは、その子をにらみつけて、おきあがりしました。すると、子どもたちは、ワーツといって、むこうへにげていきます。

もうこんなところに、たおれているわけにはいきません。子どもたちが、またいたずらをするにきまっているからです。

光子さんは、ひぎのいたみをこらえて、たちあがり、トボトボと、歩きだしました。

「ワイー、ワイー、ぼちいおねえちゃんよう。どこへいくんだよう。」

あとから、子どもたちがゾロゾロついてきます。

ふりむいて、こわい顔で、にらみつけますと、子どもたちは、ワーツといって、にげますが、しばらくすると、また、ちかづいてきて、下品なことばで、からかうのです。

光子さんは、ワーツと声をあげて、泣きだしたくなりました。しかし、じつところらえて、くちびるをかみしめて、トットと、急ぎ足に歩きました。

町かどを、まがりまがり、四百メートルも歩くと、いつのまにか、子どもたちは、あとをつけてこなくなりました。

ああ、たすかったと思いながら、バスの停留所のほうへ歩いていきます。いまから銀座

のお店にいこう。そして、おとうさんにわけを話して、たすけてもらおう。そのほかにてだてはない。光子さんは、そう考えて、バスに乗るつもりでいたのですが、ふと気がつく、一円もお金がないのです。といつて、歩いて銀座までいくのは、たいへんです。どうしたらいいだろうと、しあん思案にくれるのでした。

光子さんは、すこしも気がつきませんでした。さつきから、いたずら小僧たちとはべつに、光子さんのあとをつけてくる、ひとりのあやしい男がありました。ネズミ色の背広に、ネズミ色のオーバーをきて、おなじ色のとりうちぼう鳥打帽をかぶっています。ひげのないツルツとした顔に、まんまるなめがねをかけているのですが、その顔が、なんだかへんなのです。

顔色がよくつて、しわがなく、スベスベしていて、洋服屋のショーウィンドーにかざつてあるマネキンのような顔なのです。人形のような紳士です。

光子さんが、お金がなくて、バスに乗れないので、思案にくれて、たちどまっていますと、その人形紳士は、なにげなく、光子さんをおいこして、歩いていきましたが、そのとき、ポケットから銀貨をとりだして、そつと地面におとし、そのまま、むこうのかどをまがりました。

かどをまがったかとおもうと、そこにたちどまって、へいのかどから、目ばかり出して、そつと光子さんのほうを、のぞいているのです。

光子さんは、立ちどまっただけでも、しかたがないので、うなだれたまま、歩きだしましたが、目が地面にそそがれているので、すこし歩くと、さつき人形紳士がおとしていった銀貨をみつけました。ひろいあげてみると、百円銀貨です。これがあればバスにのれます。だれがおとしたのかしらないが、しばらくおかりしておこうと、心をきめました。それから、急ぎ足になつて、停留所につくと、銀座を通るバスをまって、乗りこみました。

さいわい、立っている人が多いので、車内のみんなに、きたない姿を見られることはありませんでしたが、車のすみに、ソツと立っていても、すぐ近くの人からは、ジロジロながめられました。車しや掌しょうさんまでが、顔をしかめて、じつと、こちらを見ているのです。光子さんは、そのはずかしさがいっばいで、すこしも気づきませんでした。あのマネキンのような顔をした人形紳士も、このバスに乗っていました。

光子さんのあとから、乗りこんで、光子さんから、できるだけはなれて、そつぽをむいて、そしらぬ顔で、つりかわにぶらさがっているのです。ときどき、チラツ、チラツと、光子さんのほうを、ぬすみ見るのですが、光子さんは、銀座でおられるまで、気づかないで

いました。

バスをおりると、光子さんは、すぐその玉村宝石店へいそぎましたが、人形紳士もそこでおりて、光子さんのあとをおいました。にぎやかな銀座通りのことですから、もう光子さんにかんづかれる心配はありません。

光子さんは、玉村宝石店のきらびやかなショーウィンドーのあいだから、店にはいつていきました。

「おいおい、きみ、こんなところにはいつてきちやいけない。おもらいなら、うらへまわりなさい。」

わかい店員が、光子さんのこじき姿を見て、どなりつけました。

光子さんは、その店員をよく知っていました。しかし、あいてには、こちらがわからないのです。

「ねえ、あたし、わけがあつて、こんななりをしているけど、玉村光子よ。おとうさん、おくにいらつしやるでしょう。通つてもいいわね。」

店員はびつくりして、まゆずみでよくれた光子さんの顔を、ジロジロとながめました。

「なんだつて？　光子さんだつて？　おじょうさんが、そんなきたない服をきられるわけ

がないじゃないか。おどかさなくてくれよ。さあ、出ていった、出ていった。」

「いいえ、どうしても、おとうさんにあります。じやましないで、おくにとおしておくれ。」

「いけない。いけないったら。こいつ気持ちがいだな。さあ、出ていけ。出ていかないと、なぐるぞつ。」

そのさわぎをききつけたのか、そのとき、おくとのさかいのガラスのドアが、サツとひらいて、おとうさんの玉村銀之助さんの姿があらわれました。

「かまわないから、表におもてほうりだしてしまいな。そいつはおそろしいかたりだ。顔がにているのをさいわい、光子だといって、わしをゆるするつもりなんだ。はやく、ほうりだしてしまえ。」

ああ、おとうさんまでが、と思うと、光子さんは泣きだしたくなりました。

「おとうさん、わけをはなしますから、きくだけきいてください。こんななりをしています。すが、あたしは光子にちがいないのです。」

死にもぐるいで、すがりつくようにたのみましたが、玉村さんは、とりあってくれませんでした。

「そのわけは、もうちゃんと知っている。ほんとうの光子からきいている。光子、あいつに顔を見せてやりなさい。」

その声におうじて、光子さんになりすました、あのこじきむすめが、玉村さんのうしろから、美しい顔を出しました。

ああ、なんとというすばやさ！ にせ光子は、ほんとうの光子が、おとうさんのたすけをもとめて、ここにくることをさっして、自動車でさきまわりをしたのでしよう。そして、おとうさんをときつけて、いつほんものがあらわれても、だいじょうぶなようにしておいたのです。

それにしても、玉村さんまでが、にせものを信じるといふのは、にせものが、ほんものと、すこしもちがわないからです。どうして、こんなにもよくにた人間がいたのでしょうか。考えられないことです。おそろしい夢でも見ているようです。これにはなにか、ふかいわけがあるのでしょうか。いままでの科学では、とけないような、おそろしい秘密があるのでしょうか。

しかし、光子さんは、そこまでは考えませんでした。ただ、くやくして、かなしくて、はらわたがにえくりかえるようです。

「ちがいます。そいつが、にせものです。服をとりかえたのです。あたしの服を、そいつがきているのです。あたしがほんとうの光子です。」

気ちがいのように、泣きわめく、こじきむすめを、玉村さんは、おそろしい顔で、にらみつけました。

「わかつている。おまえのいいぐさは、もうちゃんとわかっているのだ。おい、みんな、かまわないから、そいつを、表にほうりだしてしまえ。」

もう、どうすることもできません。光子さんのこじきむすめは、おおぜいの店員に、こづきまわされて、表につきだされてしまいました。

光子さんは、しばらく店の前に、うずくまっていたが、やがて、あきらめはてたように、トボトボと、歩きはじめました。

すると、さっきの仮面のような顔の人形紳士が、どこからかあらわれて、光子さんに声をかけました。

「光子さん、きみが光子さんだということは、わしがよく知っている。きつとあかしをたててあげる。しかし、いまはいけない。ひとまず、わしのうちにきなさい。そして、計画をたてて、出なおすのだ。わかったね。さあ、わしのうちにいこう。」

ボソボソと、耳のそばで、ささやくようにいうのです。

「あなた、どなたですか。」

光子さんはびつくりして、ききかえました。

「きみをよく知っているものです。あんしんしてついておいでなさい。さ、いきましよう。」

人形紳士は、そういったまま、しずかに歩きだしました。光子さんは、目に見えぬ糸でひっぱられでもするように、フラフラと、怪紳士のあとから、ついていくのでした。

小林少年

銀一君のときは、白ひげのじいさんがあらわれ、光子さんのときは、人形みたいな顔の紳士があらわれて、どことも知れぬあやしい家へつれていき、その地下室に、とじこめてしまったのです。

玉村さんのうちには、にせの光子さんと銀一君が、ちゃんといるのですから、だれも、人間がいれかわったとは気がつきません。光子さんのにせものも、銀一君のにせものも、

じつにうまく、ほんものまねをしていたのです。

ところが、たったひとり、にせの銀一君をうたがっている少年がありました。

それは、いつか銀一君がスリをはたらくところをみつけた、松井少年です。銀一君の同級生の松井君です。

松井君は、玉村銀一君とそっくりの少年が、もうひとりいることを、知っていました。もしその少年が、銀一君といれかわったら、どうなるだろうと思うと、なんだかおそろしくなってきました。

ある日、松井君は、休みの時間に、学校の運動場を、玉村銀一君と、肩をならべて歩いていました。

「ねえ、玉村君、きみ、ほんとうに玉村君だろうね。」

松井君がみょうなことをいいました。

「なにをいってるんだ。ぼくは玉村だよ。どうして、そんなことをきくんだい。」

銀一君は、おこったような顔をしました。

「きみ、それじゃあ、少年探偵団のバッジをもってるかい？」

「きょうはもってないよ。うちにあるよ。」

松井君も玉村君も、少年探偵団員でした。団員はB・Dバッジを二十個以上、いつもポケットに入れていなければならぬ規則です。悪者につれていかれるようなとき、道にばらまいて、いくさきを知らせるためです。玉村君はその規則を知らないのでしょうか。

「じゃあ、七つ道具は？」

「えっ、七つ道具って？」

少年探偵団の七つ道具は、①B・Dバッジ ②万年筆型の懐中電灯 ③呼び子の笛 ④虫めがね ⑤小型望遠鏡 ⑥磁石 ⑦手帳と鉛筆です。

「それももってないんだね。」

「うん。きょうはもってないよ。」

「じゃあ、なにとなににかいてごらん。」

玉村君は、きゆうには答えられないで、しばらく考えていましたが、やがて、どもりながら、こんなことをいうのです。

「B・Dバッジ、それから懐中電灯、えーと、それから、オモチャのピストル、とびだしナイフ、えーとそれから……。」

そこで、いきづまってしまいました。玉村君は、七つ道具を知らないのです。松井君は

さらに聞きました。

「じゃあね、七つ道具のほかにも、団長と中学生の団員だけがもっている道具があるんだよ。なんだか知ってる？」

玉村君は、口をもぐもぐさせていますが、答えることができません。知らないらしいのです。

「縄なわばしごだよ。」

松井君がおしえますと、玉村君は、いかにも知ったかぶりに、

「そうだよ。縄なわばしごだよ。二本の縄に、足をかける木の棒が、たくさんくくりつけてある。」

「ちがうよ。黒いきぬ糸を、よりあわせたひもだよ。二本じゃない。一本きりだよ。そのきぬひもに、三十センチおきに、足の指をかける、むすび玉がついているんだよ。」

「あつ、そうだ。ぼく、うっかりしてたよ。黒いきぬ糸だったねえ。」

玉村君はそういつて、ごまかそうとしましたが、ほんとうは、なにも知らないことが、わかりました。

松井君は、いよいよ、こいつはにせものにならぬかと思いましたが、その場は、なにげ

なくわかれて、その日、学校がひけてから、明智探偵事務所の小林少年をたずねました。

明智先生は北海道に事件があつて、旅行中でした。小林少年は、少女助手のマユミさんとふたりで、るす番をしていました。

小林君は、少年探偵団長です。すぐに松井君を応接室にとおして、話をききました。

松井君は、お祭りの日に、玉村銀一君とそっくりの少年を見たことから、きょう学校のできごとまで、すっかり話しました。

「だから、ひよつとすると、玉村君は、にせものといれかわっているんじゃないかと思うのです。そんなによく似た人間がいるなんて、ふしぎでしょうがないけれど、ほんとうなんです。ぼくは、そいつがスリをはたらいているところを、ちゃんと見たんですからね。」

「へんな話だねえ。ふたごでもないのに、そっくりの人間が、ふたりいるなんて、ちよつと、考えられないことだねえ。」

さすがの小林少年も、こんな話をきくのは、はじめてでした。

「だから、ふしぎなんですよ。しかし、たしかに、ふたご以上に、よく似たやつがいるんです。そいつが、玉村君のまわりに、ウロウロしていたんですからね。ぼくはどうもあやしいと思うんです。バッジももっていないし、七つ道具のことも知らないのは、ほんとう

の玉村君でないでしょうこですよ。」

「なにか、たくらんでいるのかもしれないね。」

「玉村君のおとうさんは、宝石王でしょう。宝石を手に入れるための陰謀いんぼうかもしれないません。玉村君のおとうさんに、このことを知らせてあげなくてもいいでしょうか。」

「うん、そうだね。明智先生がいらつしやるといいんだが、一週間ぐらいはお帰りにならない。しかし、きみの話だと、ほつてもおけないようだから、ぼくが玉村君のおとうさんにあつて、このことをお話ししておいたほうがいいかもしれないね。」

「ええ、ぼくもそう思うんです。にせものといれかわつた玉村君が、どこかで、ひどいめにあつていると、たいへんですからね。」

「じゃあ、電話をかけて、玉村さんのつごうを聞いてみよう。いまは銀座の店におられるだろうね。店をたずねるのがいい。すまいのほうにはにせの銀一君がいるんだからね。」

そこで、小林君が電話をかけますと、玉村銀之助さんは、ちようど店にいて、電話口に出ました。

玉村さんは小林君をよく知っていました。名探偵明智小五郎あけちこごろうの少年助手として、たびたびてがらをたてて、新聞にのるものですから、小林少年の名を知らない人はありません。

ことに玉村銀一君は少年探偵団員なので、その団長の小林君には、おとうさんも、したしみをかんじていたのです。

「うちの銀一が、いつもお世話になります。」

玉村さんは、電話口で、そんなあいさつをするのでした。

「その銀一君のことで、至急にお話ししたいことがあるのです。これからお店のほうに、おじやましていいでしょうか。」

といいますと、それでは、お待ちしていますから、どうかおいでください、という返事でした。

それから三十分ほどたつて、銀座の玉村宝石店の社長室には、社長の玉村銀之助さんと、小林少年と、松井少年とが、テーブルにむかいあっていました。

小林君が、松井君から聞いたことを、くわしく話しますと、玉村さんは、はじめは、そんなばかなことがと、とりあげようともしませんでしたが、小林君が、うたがわしいわけを、だんだん、話していきますと、玉村さんは腕をくんで、考えこんでしまいました。

そして、しばらくすると、ひとりごとのように、つぶやくのでした。

「そうすると、あのこじきむすめも、ほんとうの光子だったかもしれないぞ。」

「えっ、こじきむすめですって？」

小林君が、おどろいて聞きかえます。

「二―三日前に、こじきむすめが、この店にやってきましてね。わたしがほんとうの光子だ。おとうさんのそばにいるのは、にせものだといいはるのです。」

光子というのは銀一の姉ですが、その光子が、じぶんとよくにたこじきむすめと、服のとりかえっこをしたというのです。だが、そんなばかなことは、しんじられないので、こじきむすめを、店からつきだしてしまいました。思いましたが、思いだしてみると、そのこじきは、光子とそっくりの顔をしていました。銀一がにせものだとすると、光子もにせものと、いれかわっているかもしれない。

だが、まさかそんなことが……いや、いや、そうかもしれない。ああ、おそろしいことだ。このふしぎなできごとのうらには、なにかの、ふかいたくらみがあるのかもしれない。しかし、そんなによくにた人間がいるものかしら。小林さん、きみはどう思います？

「わかりません。なにか、とほうもない魔術がおこなわれているのです。この事件のうらには、おそろしい悪人がかくれているのかもしれない。」

ぼくはこの事件を、探偵してみたいと思います。明智先生がおるすなので、ざんねんで

すが、ぼくにできるだけのことを、やってみたいと思います。」

「ああ、それは、わたしからおねがいたいところですよ。わたしも、それとなく、光子と銀一のようなすを注意しますが、あなたも外から、さぐつてください。もし、にせものとするれば、どこかにかくれている、このたくらみのなかまと連絡をとるでしょうからね。」

それから、いろいろ、うちあわせをしたうえ、小林、松井の二少年は、玉村さんにいまをつけて、それぞれの家に帰りました。

黄金のトラ

小林君は、そのばんから、きたないこじき少年にばけて、渋谷の玉村さんのうちの見はりをつづけました。

はじめの夜は、なにごとありませんでしたが、ふたばんめに、おそろしいことがおこりました。

月もない、まっくらな夜です。八時ごろでした。

玉村さんのやしきの、うらてのコンクリートべいの下に、一枚のむしろがすててありま

す。とおくの街灯の光で、それがぼんやりと見えています。

あつ、そのむしろが、モゾモゾと動きまわりました。よく見ると、むしろの下に人間がいるのです。こじきが、むしろをかぶって、寝ているのかもしれない。そのへんは、さびしいやしき町ですから、なんの音もなく、死んだように、しずまりかえっています。

しばらくすると、町のむこうから、まっくらな大きなものが、スーツと、こちらへ近づいてきました。

ヘッドライトをけした自動車です。

そのあやしい自動車は、こじきの寝ているむしろのそばに、とまりました。

自動車のドアが、音もなくひらいて、へんてこな大きなものが、とびだしてきました。

金色に光っています。それは人間ではなくて、四つ足で歩くもうじゆう猛獣もうじゆうでした。トラです。

黄金のトラです。

東京の町の中にトラがあらわれたのです。しかも、そいつは自動車に乗ってやってきたのです。

金色に光るトラは、そのへんをノソノソと歩いていましたが、グツと首を低くして、ねらいをさだめたかと思うと、パツと、ひととびで、コンクリートべいの上にかかけあがり、

まるで綱わたりのように、せまいへいのでっぺんを歩いていきます。

地面のむしろの下の人間は、首をもたげて、じっと、それを見つめていました。

へいの上を十メートルほど歩くと、黄金のトラは、玉村さんのやしきの中に、ピョイととびおりて、姿をけしてしまいました。

地面のむしろが、パツとはねのけられ、その下に寝ていた人間が、立ちあがりました。

少年です。ボロボロの服をきた、こじき少年です。

少年は、すぐそばにとまっている自動車の中をのぞきました。そして、思わず、「おやっ。」と声をたてました。

自動車にはだれもいないのです。運転手もいないのです。では、あの金色のトラが、自動車を自分で運転してきたのでしょうか。そんな器用な猛獣がいるのでしょうか。

こじき少年は、だれもいないことをたしかめると、車のうしろにまわって、そのトラのふたに手をかけて、もちあげてみました。

すると、かぎがかけないとみえて、ふたはスーツとひらきました。中をのぞくと、荷物もなく、からっぽです。こじき少年は、トランクにはいりこんで、その中に身をかくし、ふたをしめてしまいました。尾行するつもりなのです。

いまに黄金のトラがもどつてくるでしょう。そして、自動車を運転して、どこかへいくでしょう。こじき少年は、そのいくさきを、つきとめるつもりなのです。

それから十分ほど、なにごともおこりませんでした。すこしのもの音もなく、すこしの動くものもありません。

やがて、コンクリートべいの上から、金色のものが、ヒヨイとのぞきました。トラの顔です。らんらんと光る目で、じつとへいの外をながめています。

それから、へいの上へのぼつて、ノソノソと歩きはじめ、自動車の近くまでくると、ピヨイと地面にとびおりて、車の運転席にはいりこみました。

やっぱり、この猛獣は、自動車の運転ができるのです。

自動車は、さびしい町から、さびしい町へと走っていきます。

二十分もたったころ、大きな洋館の門の中にはいつて、そこでとまりました。

黄金のトラは、自動車からおりて、四つんばいになって、玄関のドアの前までいくと、あと足で立ちあがり、まるで人間のように、ドアをひらくと、その中に姿をけしてしましました。

こじき少年は、トランクのふたを、ほそめにひらいて、そのようすを見ていましたが、

トラが中にはいつてしまうと、ふたをぜんぶひらいて、トランクからはいだし、玄関のドアのそばまでいって、中のようすに、耳をすましました。

しばらくまって、そつとドアをひらいて、のぞいてみますと、どこかに、うすぐらい電灯がついていて、そのへんがボンヤリと見えています。

玄関のホールから、廊下がおくへつづいていますが、そこには人影もありません。いやトラの影もありません。

こじき少年は、だいたんにも、ドアの中にしのびこみ、足音をしのばせながら、廊下をおくのほうへすすんでいきました。

二十メートルもいくと、むこうにキラツと光るものが見えました。黄金のトラの背中です。そいつは、やつぱり、あと足で立って歩いているのです。

「ウフフフフ……。」

どこからか、みような笑い声が聞こえてきます。

こじき少年は、びつくりして、たちどまりました。

ああ、やつぱりそうです。トラが笑ったのです。

「ウフフフフ……。」

そして、ヒョイト、こちらをふりむきました。らんらんと光る目が、ほそくなつて、口は三日月形みかづきに笑つていますのです。

「おい小林君。きみは、こじきにばけているが、明智の助手の小林だろう。うまく、おれの計略にかかったな。きみはきつと、おれを尾行するだろうと思つた。それで、さそいをかけたのだよ。」

トラが人間のことばをしゃべつたのです。

こじき少年は、やっぱり小林君でした。小林君は、まんまと敵のわなにかかつてしまつたのです。

これはいけないと思ひ、いそいで、にげだそうとしました。

「おつと、にげようたつて、にげられやしないよ。ほらね。ワハハハ……。」

黄金のトラが、おそろしい声で笑いだしました。

その笑い声といつしよに、ダーツという音がして、てんじょうから大きな鉄ごうしがおちてきました。

廊下いっぱいの鉄ごうしです。もう、うしろへはいけません。

しかたがないので、前へつきすすもうとすると、またしても、ダダーツという地ひびき

がして、前にも鉄ごうしがおちてきました。

前とうしろに鉄ごうしがおちたのですから、おりの中にとじこめられたのとおなじこと
です。

「ワハハハハ……、どうだ、このしかけには、おどろいたか。さすがの小林少年探偵も、
きょうから、おれのとりこだ。いまに、べつの部屋にいられてやるから、ゆっくり、滞在し
ていくがいい。」

鉄ごうしのむこうから、トラがしゃべっているのです。ものをいうたびに、口がガツと
さけて、赤い舌がペロペロと動くのです。

「きみは、いったい何者だつ。」

小林君は、せいっぱいの声で、どなりつけました。

「おれは人間だよ。しかし、きまった顔をもたない人間だ。だれにでもばけることができ
る。このとおり、猛獣にだってばけられる。トラにはかぎらない。シシにだって、ヒョウ
にだって、大蛇だいしやにだって、ばけられるのだ。

おれの名をおしえてやろう。おれは百十四歳になるニコラ博士という魔術師だ。スーパ
ーマンだ。」

「玉村銀一君とそっくりの少年をつれてきて、人間の入れかえをやったのは、きみだなっ。いったい玉村君をどこへかくしたのだ。」

「銀一君はこのうちにいるよ。いや、銀一君だけじゃない。いろいろな人間が、とりこにしてある。銀一君のねえさんもいるし、そのほかにも、きみの知らない人間がたくさんいる。」

「みんな、かえだまと、いれかえたんだな。」

「アハハハハ……、だんだんわかつてきたようだな。おどろいたか。おれはどんな人間のかえだまでも、つくることができるのだ。」

たとえば、きみとそっくりのかえだまだつて、わけなくできる。魔法博士の神通力だよ。アハハハハ……。」

黄金のトラは、あと足で立ちあがって、自由自在に、人間のことばをしゃべっているのです。じつに、なんともいえない、ふしぎなありさまです。聞いているうちに、小林君は、ゾーツとおそろしくなってきました。

この金色のトラのいうことが、ほんとうだとすると、小林少年は、ここにとじこめられたまま、小林少年とそっくりのかえだまが、明智事務所に帰っていくことになるかもしれない。

ません。すると、どんなことがおこるでしょう。考えれば考えるほど、おそろしくなってくるではありませんか。

猛獣自動車

宝石王の玉村銀之助さんは、じぶんのやしきのまわりを見はついていた小林少年が怪人につれさられたことは、すこしも知りません。あのトラが自動車を運転するという奇妙な事件のあつた翌日、午前十時ごろ、玉村さんはいつものように、自動車にのつて、銀座の店へ出かけるのでした。

道路は自動車でいっぱいです。とある交差点で、何十台というトラックや、バスや、乗用車が、三列にならんでとまっています。そうして、十分もじつとまっていなければならぬのです。玉村さんは、車のこんぎつには、なれていましたから、イライラしてもしかたがないと、じつと目をつぶって、クッションにもたれていました。

右の窓のガラスが、半分ひらいてあります。そのガラスをコツコツとたたくものがありました。

おやつとおもつて、目をひらきますと、右がわすれすれに、一台の乗用車がとまつていて、その窓が、こちらの窓のすぐそばにあるのです。

玉村さんが、そこを見たときには、窓は、なにかボール紙のようなものでふさがれていて、中は見えませんでした。

しかし、さつき、コツコツと、こちらのガラスをたたいたのは、たしかに、その窓の中にいる人です。たたいておいて、ボール紙で窓にふたをして、かくれてしまったのでしょうか。

「へんだな。」とおもつて、じつと見ていますと、ボール紙がすこしずつ下のほうへさがつていって、そのうしろから、黄色くひかったものが、のぞきました。

まだボール紙が、半分しかひらいていないので、そのものの姿は、はっきりわかりませんが、なんだか、とてつもない、へんてこなものです。

ボール紙は、またジリジリと下のほうへさがつていきます。そして、窓の中が、すっかり見えるようになりました。

玉村さんはギョツとして、おもわず、車の中で立ちあがりそうになりました。半分ひらいたガラスの中に、おそろしいトラの顔があつたのです。

ランランとかがやく、大きな目で、じつとこちらをにらんでいます。

玉村さんは、だれかが、でっかいトラのオモチャをひぎの上のせているのではないかとおもいました。

しかし、そのトラの顔は、人間の顔の倍もあるのです。そんなでっかいオモチャがあるのでしょうか。

いや、オモチャではありません。

トラの目が動きました。口がひらきました。口の中で、まっかな舌がヘラヘラと動きまわりました。

「ウヘヘヘ……。」

なんともいえないへんな声で、トラが笑ったのです。まるで人間の老人のような、しわがれた声で、うすきみわるく笑ったのです。

笑えるのは人間だけで、ほかの動物は笑えないはずですよ。

しかも、トラのような猛獣が笑うなんて、おもいもよらないことです。

玉村さんは、あまりのふしぎさに、あつげにとられて、こわさもわすれて、ぼんやりしていました。

すると、こんどは、もつとへんなことがおこりました。トラがものをいったのです。

「用心するがいい。いまに、おそろしいことがおこる。」

たしかに、猛獣が人間のことばを、しゃべったのです。

玉村さんは、夢を見ているような気持で、まだぼんやりしていましたが、ふと気がつく
と、ここは自動車の行列のまんなかです。大きな声をたてれば、みんなが、力をかしてく
れるでしょう。いくら猛獣でも、このこんぎつのなかを、うまくにげられるものではあり
ません。

玉村さんは、前にいる運転手の肩をつついて、ささやきました。

「見たか。」

「ええ、見ました。」

ふたりで、もう一度、そのほうをふりむくと、むこうの窓は、またボール紙でふたをさ
れて、トラの姿は見えませんでした。

「みんなに知らせよう。大きな声でさげぶんだ。」

はんたいがわのドアをひらいて、からだをのりだし、

「オーイ、たいへんだあ。ここの車の中にトラがいるぞう……。」

と、なんどもくりかえして、さげました。

自動車にトラがのつているなんて、あんまりとつびなことなので、はじめは、だれも信じませんでした。ところが、しんけんにさげぶものですから、勇気のある運転手たちが、自動車からとびおりて、あつまってきました。

その人数がだんだんふえ、やがて、交通整理のおまわりさんまで、ピストルをにぎって、かけつけてきました。

みんなが、あやしい自動車のまわりをとりかこみました。

そのときには、窓のボール紙はなくなつて、中が見とおせるようになっていましたが、そこにはひとりの紳士がこしかけているばかりで、トラなど、どこにも見えません。おまわりさんが、その紳士に声をかけて、ドアをひらき、中をのぞきこみました。

「この窓からトラの顔が見えたというんですが、まさか、トラといっしょにのつていたのではないでしょうね。」

「ハハハハ……、なにをおっしゃる。そんなばかなことが、あるはずはないじゃありませんか。だれが、そんなことをいったのですか。」

「この人ですよ。」

おまわりさんが、そこに立っている玉村さんを指さしました。

「ハハハハ……、あなた、夢でも見たんでしょう。車の中でうたたねしていたんじゃないやありませんか。」

「いや、たしかに、金色のトラが……。」

玉村さんはいいかえしましたが、見たところ、トラのかげも形もないのですから、けんかになりません。

「なあんだ、夢か。いくらなんでも、トラが自動車にのっているなんて、おかしいとおもったよ。」

みんな、チエツと舌うちをして、じぶんたちの自動車へかえっていきます。

おまわりさんは、ぐずぐずしていると、自動車がたまるばかりですから、どの車も、そのまますすむように、あいずをしました。

玉村さんも、あわてて車にのりこみ、出発しましたが、車の列は、交差点で三方にわかれ、いつのまにか、あのあやしい自動車を見うしなってしまうました。

大時計の怪

玉村さんは銀座の店につくと、すぐに明智探偵事務所に電話をかけて、小林少年に店のほうへきてくれるようにたのみました。

それから三十分もすると、小林少年が、玉村宝石店の社長室へはいつてきました。

読者のみなさん、なんだかへんですね。小林少年は、ゆうべ怪人のために、あやしい洋館の地下室に、とじこめられたはずではありませんか。小林君は、はやくも、そこからぬけだしてきたのでしょうか。いやいや、そうではなさそうです。そのことは、みなさんがよくごぞんじです。

しかし、玉村さんはなにも知りません。そこへやってきたのは、ほんとうの小林少年だと思いきや、こんでいます。

玉村さんは小林君に、さっきの事件をくわしく話してきかせました。

「そのトラがね、わたしの顔を見て、用心するがいい、いまに、おそろしいことがおこる、といったのだよ。」

「えっ、トラがですか。」

小林君は、びっくりしたように、ききかえました。ほんとうの小林少年なら、じぶん

も、ゆうべ、金色のトラがしゃべるのをきいたはずではありませんか。

「そうだよ。トラがしゃべるなんて、信じられないことだ。しかし、ほんとうにしゃべったんだよ。」

「人間がトラにばけていたのでしょうか。」

「うん、わたしもそう思う。超人ニコラ博士だ。ニコラ博士は、なんにでも、ばけられるというじゃないか。」

まずトラにばけて、わたしをおどかしておいて、それから、みんなにかこまれたときには紳士にばけかわって、すましていたのかもしれない。」

「でも、おそろしいことがおこるぞと、予告をしたのですから、ゆだんはできませんね。」

「うん、それで、きみにきてもらったのだよ。この店には、たくさんの店員がいるけれども、あいてはおばけみたいなやつだからね。やっぱり名探偵のきみの知恵をかりたほうがいいとおもってね。」

「ありがとうございます。なによりも渋谷のおうちのほうが心配ですね。警察の力をかりるほかないでしょう。ぼくから警視庁の中村警部に電話でたのみましょう。そして、おうちのまわりを、まもってもらおうようにしましょう。」

玉村さんもそれがいいというので、小林君は警視庁に電話をかけましたが、中村警部はすぐにしようちして、その手配をしてくれました。中村警部は明智探偵の親友ですから、小林君をよく知っていて、少年だからといって、けいべつするようなことはないのです。「ぼくはここにいて、あなたをまもります。なんだか、きようは、あなたがあぶないような気がするんです。」

小林君は、そんなことをいって、部屋の中をコツコツと、歩きまわるのでした。しばらくすると、若い店員が社長室へはいってきました。

「れいの大時計をトラックではこんできましたが、ごらんになりますか。」

「うん、ここにはこんで、ここでひらいてもらおう。なにしろ、いまではめつたに手にはいらない美術品だからね。」

店員はそれをきくと、店のほうへもどっていきましたが、まもなく、ドカドカと足音がして、二メートルもある長方形の木箱きはこを、ふたりの運送屋の男が、はこびこんできました。この木箱の中には、西洋では「おじいちゃん時計」といわれている、人間よりも背のたかい、ふりこ時計がはいっているはずです。

玉村商店は宝石商ですが、西洋の時計などもあつかっているので、ときどき、みような

注文をうけることがあります。

あるお金持ちのおとくいが、明治時代にはやった「おじいちゃん時計」がほしいというので、さがしていたところが、りっぱな大時計がみつかったので、きょう、それを見せにきたというわけです。

その時計をみつけたブローカーの男が、ふたりの運送屋にはこぼれる木箱につきそって、はいってきました。

「やあ、橋^{はしもと}本さん、ごくろうさま。これがこのあいだお話しの時計ですね。」

玉村さんは、この橋本というブローカーとは、ついこのあいだ、はじめてあったのです。

「はい、じつにりっぱな美術品でございますよ。」

「機械もくるっていないですね。」

「ふしぎと、くるっておりません。ただしし時を知らせてくれますよ。」

「それはめずらしい。じゃあ、店のものもここによぶことにしましょうか。」

「いや、まず社長おひとりで、ごらんください。もったいぶるわけではありませんが、ひじょうにめずらしい品ですから。」

「わたしひとりだね。それもいいでしょう。しかし、この小林君は、ここにいてもかまい

ませんね。こんな小さいからだをしているが、じつは、わたしのボディーガードなんですよ。」

「かまいませんとも。そのかたがボディーガードですか。」

ブローカーはげんそうな顔つきです。

「民間探偵明智小五郎さんの助手の小林君です。」

「ああ、あの有名な小林少年ですか。そういえば新聞の写真で、よくお目にかかっていますよ。なるほど小林さんなら、たのもしいガードですね。」

そういうわけで、小林少年は、このめずらしい「おじいちゃん時計」を、玉村さんといっしょに見ることになったのですが、そうときまると、小林君はなにを思ったのか、玉村さんのそばによって、

「ドアのかぎを。」

と、ささやいて、手をだしました。

玉村さんは、ボディーガードにかぎをわたしておくのはあたりまえだとおもい、べつにうたがいをせず、ポケットからかぎを出してわたしました。

「では、箱をひらくことにします。」

ブローカーが、ふたりの運送屋の男に目くばせすると、ふたりは、くぎぬきをもって、ギイギイと、木箱のくぎをぬきはじめました。

そのとき、玉村さんが箱に気をとられているすきに、小林少年が、みようなことをしました。

小林君は、玉村さんのほうをむいたまま、横いざりに、ドアの前まで行って、手をうしろにまわして、なにくわぬ顔で、ドアにかぎをかけてしまったのです。

もつとへんなことがあります。小林君は、こちらをむいたまま、おしりのポケットから、大きなハンカチをまるめたようなものを、とりだして、ギュツと右手ににぎっているではありませんか。いったい、なにをしようというのでしょうか。

「さあ、よくごらんください。」

ブローカーが、もつたいぶつたちようしでいいました。

ふたりの男が、くぎをぬいてしまった木箱のふたを、横にのけますと、白い布ぬのでつつんだものが、箱いっぱいによこたわっています。

そのとき、部屋の中が、おそろしく、しんけんな空気で、みたされました。

ブローカーは、両手を、にぎりこぶしにして、おそろしい顔つきで、玉村さんをにらみ

つけています。

小林少年は、ドアの前から、ジリジリと、玉村さんのうしろへと、ちかづいていきます。手には、あの白いきれをまるめたものを、いつでもつかえるように、用意していました。

ふたりの男は、箱の中の白布しろぬのの、両はしをもって、一、二、三で、パツとはねのけようと、身がまえしています。

一、二、三の号ごうれい令がかかったわけではありません。しかし、ブローカーのぶきみな目が、それとおなじはたらきをしました。

パツと、白布が、めくりとられました。

「あつ！」

玉村さんは、おもわずさけんだまま、身動きもできなくなってしまいました。

木箱の中には、大時計ではなくて、ひとりの人間がよこたわっていたのです。

死人でしょうか。いやいや、生きています。しかも、それは、じつにおどろくべき人間だったのです。

その男は、箱の中でゆっくりと上半身をおこし、それからヒョイと立ちあがると、箱の外へでました。

ああ、ごらんなさい。玉村さんが、ふたりになったではありませんか。

いま箱からでた男は、玉村さんとそっくりの顔をしています。背広やネクタイまで、玉村さんのおなじです。ふたりの玉村さんが、むかいあって、一メートルのちかきで、顔をにらみあって、立ちはだかつているのです。

じつにふしぎなありさまでした。じつと見ていますと、どちらがほんもので、どちらかにせものだか、わからなくなってきました。

こんなにもよく似た人間が、この世にあるものでしょうか。超人ニコラ博士の魔術にちがいありません。しかし、このおそろしい魔術は、いったい、どんな種があるのでしょうか。

玉村さんも、そこに気がつきました。このまま、じつとしていたら、箱からでてきた男が、じぶんになりすまし、じぶんは箱づめになって、どこかへ、つれさられるのにちがいないと、気がついたのです。

店にはおおぜいの店員がいます。大声でたすけをもとめたら、すぐにかけてくるはずです。

玉村さんは、口をいっぱいにひらいてわめき声をたてようと思いました。

しかし、そのときはもうおそかったのです。いっぱいひらいた口に、パツと、白いハシカチのようなものが、とびついて、ふたをしてしまいました。小林少年が、うしろから手をまわして、麻酔薬をしませたきれを、玉村さんの口と鼻に、おしつけたのです。

それからあとは、手ばやくパタパタとことがはこばれてしまいました。

麻酔薬で気をうしなつた玉村さんは、木箱の中にねかさされ、箱のふたがくぎづけになりました。

にせの玉村さんは、ゆつたりと安^{あんらく}楽いすにこしかけて、さも社長さんらしい口ぶりで、さしずをしました。

「小林君、ドアをあけて、店のものをよんでくださらんか。」

小林少年は、いうまでもなく、これもにせものですが、さっきのかぎをポケットから出して、ドアをひらき、

「店のかた、ちよつときてください。」
と、声をかけました。

ひとりの若い店員が、いそいではいつてきました。

「じつにけしからん。きみ、これをすぐに、もつてかえってください。こんなにせものに、

ごまかされるわしじゃあない。」

といって、いまはいつてきた店員のほうにむきなおり、

「この人をおくりだしてくれたまえ。この人は、とんだごまかしものを、もちこんできたのだ。」

ブローカーの男は、首うなだれて、ふたりの運送屋に木箱をはこばせ、しおしおと店をでていきました。

外にはトラックがまたせてあったので、木箱をそれにのせ、ブローカーもそのわきにのって、トラックは、どことも知れず、走りさってしまいました。

さいごのひとり

さて、銀座の店で、玉村銀之助さんが、にせものといれかえられたあくる日の夕方、渋谷区の玉村さんの家に、またしても、おそろしいことがおこったのです。

にせものの光子さんと、銀一君は、一階の子ども部屋の窓から、庭をながめていました。あたりはもううす暗くなっていて、木のしげった中は、まっくらです。

そのまっくらな中で、チラツと、金色のものが動いたのです。ふたりは、それを見つめていました。

「なにを見ているんだね。庭になにかいるのかね。」

ふりむくと、そこにおとうさんの銀之助さんが立っていて、にこにこ笑っていました。いうまでもなく、このおとうさんも、にせものなのです。

「木の下に金色のものが見えたくて。」

銀一君がこたえました。

「えっ、金色のものだつて？」

「ええ、きつとあいつですよ。ね、あの金色のトラですよ。」

そのとき、家の横から、人の姿があらわれ、庭のむこうのほうへ、歩いていくのが見えしました。洋服をきた女の姿です。

「あつ、おかあさんだわ。どうして庭へ出ていらつしやつたのでしょうか。」

光子さんが、ふしぎそうに、つぶやきました。

「あつ、庭のへいの戸がひらいた。だれかはいつてくる。おかあさんはきつと、あの人に会いにいったんだよ。」

銀一君が大きな声でいいました。

おかあさんのあき子さんは、夕やみの中を、いそぎ足で、裏口のほうへ、すすんでいきます。そこから、はいつてきた男に、約束でもしてあったのでしよう。

あき子さんの歩いていく左がわに、大きな木のしげったところがあり、その中はまっくらです。

「あっ！」

光子さんも、銀一君も、おとうさんも、おなじように、おどろきの声をたてました。

木のしげみの中に、ピカツと光ったものがあるからです。

やがて、そのものが全身をあらわしたのを見ると、やっぱりあのおそろしい金色のトラでした。

そいつは、ノソノソと木のしげみから、はいだしてきて、ウォーツと、ものすごいなり声をたてるのでした。

おかあさんのあき子さんは、ハツとして、そのほうを見ましたが、見たかと思うと、クナクナと、くずれるように、その場にたおれてしまいました。

それを窓からながめた、おとうさんも、光子、銀一のきょうだいも、ふつうならば、な

んとかしておかあさんをたすけようと、とびだしていったのでしようが、三人ともにせものですから、おかあさんがたおれたつて、へいきです。

おとうさんと、ふたりの子どもは顔を見あわせて、ニンマリと笑いました。ああ、なんという、無慈悲な笑い顔だったでしょう。

庭のむこうでは、裏口から、さつきの男のほかに、もうひとり、はいつてくるのが見え
ました。

男たちは、たおれているあき子さんのそばによると、そのからだをふたりでかかえて、
裏口の外へ出ていきます。

あの金色のトラは、あき子さんをきぜつさせてしまえば、もう用事はないのでしよう。
また、木のしげみのくらやみの中に、姿をかくしてしまいました。

窓の三人は、もう一度、顔を見あわせて、ニンマリと笑いました。三人とも、あき子さ
んが、どんなめにあうのか、ちゃんと知っているらしいのです。

裏口のへいの外には、一台の自動車がとまっています。ふたりの男は、その車のドア
をひらいて、はこびだしてきたあき子さんのからだを、中にいれました。

すると、それといれちがいに、車の中から、あき子さんが、とびだしてきました。気を

うしなっていたあき子さんが、きゆうに、正しょうき氣づいて、いれられたばかりの車から、出てきたのでしょうか。

いや、そうではありません。車の中をのぞいてみますと、そのシートに、あき子さんが目をつむって、たおれているではありませんか。

車から出てきたのは、あき子さんとそっくりの顔をした、べつの女なのです。ニコラ博士の魔法が、またしても、にせものをつくりだしたのです。

ふたりの男が、車の中にはいると、自動車はしずかに、すべりだし、どこともしれず、走りさってしまいました。

あき子さんとおなじ顔をして、おなじ服をきた女は、裏口をはいると、その戸をしめて、ゆつくり、こちらへちかづいてきました。

じつによくにっています。男たちに、かつぎだされたあき子さんが、そのまま、もどってきたとしか思われません。

あき子さんは、窓の下までくると、そこからのぞいている三人を見あげて、ニツコリと笑いました。

「あき子、話があるから、あがつていらっしやい。」

玉村さんが、声をかけました。これで玉村家の家族はぜんぶにせものにかわってしまつたのです。

しかし、四人とも、おたがいにそれを知りながら、まるでほんもののように、はなしあつていたのでした。

日本中の宝石

それからしばらくすると、玉村さんと、あき子夫人と、光子さんと、銀一君の四人は、玉村さんの書齋にあつまっていました。

その部屋の一方の壁に、大きな金庫がはめこんであります。にせの玉村さんは、ダイヤルの暗号を、ちゃんと知っていて、それをまわして、金庫をひらきました。

金庫の中には、たくさんのひきだしがついていて、それに宝石がいっぱいはいっているのです。

銀座の店においてあるのは、ありふれた宝石ばかりで、ほんとうにたいせつな宝石は、みんなこの金庫にしまつてあるのです。店にある宝石でも、ひとつ百万円以上のものは、

まい日かばんに入れてもちかえり、この金庫にしまっておくことになっていました。

「このひきだしには、何百という宝石がはいっている。十億円をこすわしの財産だ。どこへもつていこうと、わしの自由な財産だ。わかったかね。」

この宝石のために、われわれは、こうしてはたらいっているのだ。いや、ここにある宝石だけではない。宝石王玉村銀之助の信用を利用して、日本全国のめぼしい宝石を、すつかりあつめてしまおうというのが、ニコラ博士の計画だ。」

「どうして、あつめるのでしょうか。」

にせのあき子夫人が、ききかえました。

「それには、こういう方法がある。まず、わしが主催者になって、全国の宝石商や、有名な宝石をもっているお金持ちによびかけて、宝石展覧会をひらくのだ。そして、日本のめぼしい宝石を、一カ所にあつめてしまうのだ。」

展覧会をひらいているあいだに、出品されたぜんぶの宝石のにせものをつくるのだ。人間のにせものさえこしらえるニコラ博士のことだ、宝石のにせものぐらい、朝めし前だよ。それにせものと、ほんものと、すりかえてしまう。わしは展覧会的主催者だから、すりかえるのは、わけもないことだからね。」

「ふーん、うまい考えですね。そうして展覧会の宝石をすりかえたあとは、わたしたちは、この世から消えうせてしまうのでしょうかね。」

「そうだよ。そこで、われわれにせもの役目は、おわるのだ。」

にせの玉村さんは、金庫のとびらをしめると、ベルをおして、女中さんをよび、ばんごはんの用意をするように、いつつけました。玉村家にはコックのおばさんがいて、毎日おいしいごちそうをつくっているのです。

しばらくすると、四人は食堂のテーブルにむかって、食事をしていました。おいしい洋食のおさらが、つぎつぎとはこぼれます。

玉村家の書生さんも、女中さんも、コックのおばさんも、玉村さんたち四人が、ぜんぶにせものとは、すこしも気がつきません。いつものご主人たちと信じきって、いつつけに、そむかないようにしていました。

「もうこれで、すっかり安心ですね。そのせいか、こんやのごちそうは、たいへん、おいしゅうございますわ。」

あき子夫人が、フォークで肉を口にはこびながら、たのしそうにいました。

「うん、そうだね。わしも、このブドウ酒が、いつもよりもうまいようだ。それにしても

宝石展覧会を、はやくひらきたいものだね。」

「ぼくたちも、その展覧会が、はやく見たいよ。ねえ、ねえさん。」

「ええ、日本中の有名な宝石が、ぜんぶあつまつたら、どんなにきれいでしょね。」

そのとき、女中さんがはいつてきて、明智探偵の助手の小林少年が、たずねてきたことを知らせました。

「ああ、それはちようどいい。ここにおとおししなさい。」

小林少年のここに顔があらわれ、テーブルにすわりますと、そこに新しい料理のさらがはこばれ、小林君も食事のなかまにくわりました。

「玉村さん、銀一君の友だちの松井君が、へんなことをいつてきたので、ぼくも一度は光子さんや銀一君をうたがいましたが、みんな松井君のひとりごとがでんだとわかりました。同じ顔の人間が、この世にふたりいるなんて考えられないことですからね。」

「そうですよ、小林さん。そんなばかなこと、あるはずがないやね。おかげで、わしもすつかり安心しましたよ。」

玉村さんはそういつて、さっきの宝石展覧会の話をしました。

「そりやすばらしいですね。日本中の名だかい宝石を、ぜんぶあつめる展覧会なんて、こ

れまで一度もなかったでしょう。ぼくも見にいけますよ。どんなに美しいことでしょうね。
 「
 もちろん、この小林少年もにせものです。五人のにせものが、同じテーブルをかこんで、
 さもほんものらしく、たのしげに語りあっているのです。

空飛ぶ超ちようじん人

お話かわって、やはりそのころの、ある夜のことでした。

少年探偵団のおもな少年たち十人が、芝公園の森の中にあつまっていました。

その十人のなかには、小林団長と、中学二年の白井保君もまじっていました。白井君は銀座の白井美術店の子どもなのです。読者諸君はこの白井保君の名を、どこかで読まれたでしょう。ひとつ思いだしてみてください。

少年たちは小林団長のまわりを、まるくとりかこんでいました。空には満月にちかい月がさえて、みんなの顔を青白くてらしています。

「こんやここにあつまつたのは、この森の中におこる、ふしぎなできごとを見るためです。

きみたちは、映画やテレビで、アメリカのスーパーマンが空を飛ぶのを見たことがあるでしょう。あれとよく似たスーパーマンが、日本にもあらわれたのです。

ここにいる白井保君が、そのスーパーマンの空を飛ぶところを見たのです。そして、その人と話をしました。その人は、超人ニコラ博士と名のつたそうです。」

「あ、超人ニコラ……。」

「ニコラ博士……。」

少年たちが、口々に、つぶやきました。超人ニコラ博士の名は、いつとはなく、少年探偵団員たちに知れわたっていたのです。

「ニコラ博士は白井君に約束しました。こんや八時に、芝公園のこの森の中に飛んでくるから、少年探偵団の友だちをさそって見にくるがいいといったそうです。」

ぼくも、べつのに、ニコラ博士にあったことがあります。そのとき、博士は長い白ひげを胸にたれた老人でした。しかし、博士のほんとうの姿はわかりません。自由に顔かたちをかえることができるからです。あるときは人形のような顔をしていたといいます。白井君があつたときには、どんな顔をしていたのですか。」

「まっかな顔をしていました。かみの毛も、まゆ毛も白くて白いひげをはやしていました。」

むかしの絵にあるテングにそっくりでした。」

「そうだ、日本のテングも空を飛ぶことができた。だから、博士はテングの姿になって、飛んでみせるのだよ。」

ニコラ博士が、どういう悪事をはたらいているか、少年たちには、まだよくわかりません。ですから、これを警察に知らせて、博士をつかまえるということは、考えてもみないのでした。それよりも、スーパーマンが空を飛ぶのを、見たくてたまらなかつたのです。

「いま七時五十分だ。森の中にはいって、まつことにしよう。月の光であかるいから、空飛ぶ博士が、よく見えるだろう。」

十人の少年たちは、ゾロゾロと森の中にはいっていきました。高い木が立ちならんで、あるあいだに、まるい空地があります。

「約束の場所は、ここだよ。」

白井君がそういつて、みんなの歩くのをとめました。

十人は空地の一方のすみに、ひとかたまりになって、ボソボソと、ささやきあつていきます。

「八時五分前だよ。」

小林団長が、腕時計を月の光にすかして見ながら、いいました。

もうあと四分、……三分、……二分、……一分。八時はまたたくまに、ちかづいてきました。

「あつ、飛んでくる。ほら……。」

ひとりの少年が、空を指さして、さげびました。

ああ、ごらんなさい。むこうの空から、一直線に飛んでくるのです。黒いマントを、コムモリの羽のようにひるがえし、フサフサとした白ひげを風になびかせながら、両手をまっすぐ前につきだして、水の中をおよぐように、こちらへ、ちかづいてくるのです。

「あつ、赤い顔してる。でっかい鼻がついている。テングさまそっくりだ。」

もう、そこまで見わけられるのです。

空飛ぶ超人は、一本の高いスギの木のとっぺんにちかづくと、そのこずえの枝に、こしかけました。

「あなたは、ニコラ博士ですか。」

白井君が、大きな声でたずねました。

「そうだよ。きみたちは少年探偵団だね。」

「そうです。ここへおりてきませんか。」

「こんどは、小林団長がさげびました。」

「きみは、小林君だね。」

「そうです。」

「じゃあ、そこへいくよ。」

ニコラ博士は、サルのように、木の枝をつたいながら、少年たちのそばにおりてきました。

ほんとうに、まっかなテングさまの顔です。頭には、針金のような白いかみの毛が、モジャモジャとみだれています。

肩から黒いマントをヒラヒラさせて、その下には、ピッタリ身についた黒いシャツとズボンはいています。

少年たちは、そのぶきみな姿に、思わず、あとじさりをしました。

「わしは、きみたちのような少年がすきだ。なにもしないから、こわがることはない。さあ、わしについて、こちらへくるがいい。きみたちに、おもしろいものを見せてやるよ。」

こわい顔をしています、いうことはやさしいので、少年たちは、だんだんニコラ博士

のほうへ、ちかよっていきました。

すると、博士は、

「さあ、わしについてくるのだ。」

といいながら、森のおくへと、はいっていきます。

十人の少年たちは、あとにつづきました。枝がしげりあっているので、月の光もささず、そのへんはもうまっくらです。

ニコラ博士は、フワフワと、宙ちゆうにうくように、歩いていきます。やみのなかでも、博士の姿だけは、クツキリと見えるのです。

「あつ。」

びつくりするようなさげび声が、ひびきわたりました。ひとりや、ふたりの声ではありません。十人の少年が、一度にさけんだような、おそろしい声でした。

少年たちの足の下の地面が、消えてしまったのです。あつというまに、十人のからだは、下へおちていきました。

ドシンと、しりもちをついたところは、木の葉がいつぱいたまっています、それほどいたくはありませんでした。

しかし、それはふかい穴の底で、とても、はいあがることはできません。

「ワハハハハ……、ざまあみろ。少年探偵団は、なまいきにも、わしの正体を探偵しようとした。わしにはそれがちやんとわかっていたので、ちよつと、おかえしをしたんだよ。ワハハハハ……、いいきみだ。いつまでも、その穴の中でくるしむがいい。」

ニコラ博士の笑い声は、だんだん、上のほうへ、とおざかっていきました。さっきのスキの木にのぼっていったのでしよう。

それからしばらくすると、スキの木のとっぺんから、大きなコウモリのようなものが、月夜の空へ飛びたっていくのが、ながめられました。むろん超人ニコラ博士の飛行姿です。十人の少年がおちこんだのは、ニコラ博士が、まえもってこしらえておいた、おとし穴でした。大きな穴の上にかれ枝をならべ、その上に木の葉をつみかさねて、穴とわからないようにしてあったのです。

少年たちは、なかまの背中につけて、やっと穴の外にはいだし、こんどは、その上から手をのぼして、なかまの少年たちを、ひっぱりあげるといいうやりかたで、とうとう、みんなが穴の外に出ることができました。

それにしても、少年たちを、ここにつれだしたのは小林団長と白井保君でした。このふ

たりが、とつくににせものにかわつてゐることは、読者諸君がよくごぞんじですね。にせものは、つまり博士の手下ですから、少年たちをくるしめる手びきをしたのは、あたりまえです。

一本の針金

ところで、ほんとうの小林君は、ニコラ博士の手下の、ふたりの男につれられて、地下室の牢屋の中へいれられてしまいました。

そのおなじ地下室には、玉村銀一君や、白井美術店の子ども白井保君なども、とじこめられていたのですが、小林君のいれられた牢屋は、銀一君たちの牢屋とは、すこしはなれていましたので、小林君は、まだなにも知りません。

ふたりの男が、小林君を牢屋に連れて、鉄ごうしにかぎをかけて、いつてしまいますと、それといれかわるように、鉄ごうしの外へ、白ひげの老人が、あらわれました。さつきまでトラにばけていたニコラ博士が、こんどは老人に姿をかえているのです。

「小林君、少年名探偵も、いくじがないねえ。まんまと、つかまってしまったじゃないか。

しばらく、ここにいてもらうよ。ひもじいおもいなんかさせないから、ゆっくり、とまっ
ていくがいい。」

「なぜ、ぼくをとじこめたのですか。」

小林君は、鉄ごうしに顔をくつつけるようにして、ききただしました。

「きみが、じゃまだからさ。わしが、おもうぞんぶんのことをやるのには、きみはじゃま
ものだ。いや、きみばかりじゃない。きみの先生の明智小五郎も、むろん、じゃまものだ。
だから明智が北海道から、かえってきたら、やっぱり、ここに、とじこめてしまうつもり
だよ。」

「えっ、明智先生を？」

小林君は、おもわず、大きな声をたてました。

「そうとも、わしは日本にきて、まもないが、明智小五郎のことは、よく知っている。日
本で、なにかわるいことをするためには、まず、明智をやっつけなければならぬ。そう
しなければ、こつちが、あいつにやられてしまうのだからね。ウフフフ……。」

「明智先生が、きみなんか、つかまるもんか。」

小林君は、顔をまっかにして、どなりました。

「ハハハハハ……、きみにとつちやあ、神さまみたいな明智先生だからね。オールマイテイだからね。だが、このニコラ博士はそれ以上の力をもっているのだ。スーパーマンだ。ワハハハハ……、スーパーマンとオールマイテイの戦いだ。ゆかい、ゆかい、かんがえただけでも、胸がおどるよ。」

「ハハハハハ……。」

小林君も、まけないで、笑いとばしました。

「きみは明智先生を知らないのだ。きみみたいなおいぼれに、まけるような先生じゃない。いまに、びつくりするときがくるよ。」

「ウフフフフ……、小林君、なかなか、いせいがいいね。なあに、どちらが、びつくりするか、そのときになってみれば、わかることだ。それよりも、小林君、きみがここにとじこめられているあいだに、もうひとりのきみが、なにをしているか、知っているかね。」

「えっ、もうひとりのぼくだって？」

「そうとも、顔もからだも、きみとそっくりのやつが、もうひとりいるんだ。そして、きみのかわりに、だいじなしごとをやっているのだ。」

それをきくと、小林君は「しまった」とおもいました。小林君がこの事件にかかりあつ

たのは、玉村銀一君が、にせものといれかわっているらしいことからでした。ニコラ博士は、なんかの魔力によって、ほんものと、全然ちがわない、にせの人間を、つくりだすことができるのかもしれない。そして、こんどは、小林君が、その魔力にかかったのです。小林君とそっくりの少年が、どこかに、もうひとり、いるらしいのです。

「ウフフフフ……、顔色がかわったね。おどろいたか。ニコラ博士の魔法が、こわくなつたか。もうひとりのきみは、いま、あるところで、わしの命令のままに、はたらいっているのだ。

え、わかるかね。きみがよびだせば、少年探偵団員は、みんな、あつまってくる。そして、きみのいうことには、なんでも、したがうのだ。

にせの小林は、なにを命令するかわからない。だから、少年探偵団員は、どんなひどいめにあうかも、わからない。いや、そんなことよりも、にせの小林は、もっともつと、おそろしい悪事をはたらいているかもしれないよ。

オールマイティーの明智先生だつて、きみとそっくりの少年のいうことなら、信用するにちがいない。そうすると、どんなことがおこるだろうね。……え、小林君。にせの小林という武器をつかえば、オールマイティーが、オールマイティーでなくなってしまうのだ

よ。ハハハハ……。」

ニコラ博士は、その笑い声をのこして、鉄ごうしの前から、むこうへ立ちさつていきました。

小林君は、すっかり、まいってしまいました。

じぶんとそっくりのにせものが、どつかで悪事をはたらいているのかとおもうと、気ではありません。しかも、その悪事が、どんなことだかわからないのですから、いよいよ心配です。

明智先生が北海道からかえられる日も、ちかづいています。もし、にせものが先生を出むかえて、うそをついたら、どんな危険なことがおこるかおそれません。

考えれば、考えるほど、心配でしかたがありません。

いつこくも早く、ここらにげだし、にせもののばけのかわをはいで、わるいことのおこるのを、ふせがなければなりません。

どうしたら、ここをにげだすことができるでしょう。小林君は、しばらくのあいだ、しんけんな顔で、かんがえていましたが、やがて、なにをおもいついたのか、ニツコリと笑いました。

「あつ、そうだ。こういうときに、あれをつかうのだ。」

そんなひとりごとをいいながら、ポケットから、筒つつのようにまるめた、レザーのシースをとりだし、鉄ごうしの外から、のぞかれやしないかと、注意しながら、そのシースをひらきました。

それは電気工事をやる人が、腰にさげている皮のシースを小さくしたようなもので、小型のナイフ、ペンチ、ヤットコなどがさしてあり、また、ふといのや、ほそいのや、十センチあまりの針金が、何本もいれてあるのでした。少年探偵団の七つ道具のほか、小林団長だけは、いつもこのシースを、用意しているのです。

小林君は、鉄ごうしのとびらの外がわの錠じょうまえ前の穴をしらべて、それに合うふとさの針金をえらびだし、ヤットコを片手に、針金ぎいくをはじめました。

針金を、錠前の穴にいれて、なにかコチコチやっていたかとおもうと、それをとりだして、さきのところを、ヤットコでキュツとまげ、また穴にはめて、コチコチやってから、とりだして、キュツとまげ、それをなんども、くりかえして、針金を、ふくぎつな、かぎのような形に、まげてしまいました。

こうして、とつさのあいかがができたのです。もとは、錠前やぶりのどろぼうが、

かんがえだしたのですが、明智探偵はそれのつくりかたを知っていて、助手の小林少年におしえておいたのです。

この針金のあいかぎをつくるのには、いろいろなコツがあつて、ひじょうにむずかしいのですが、小林君は、練習をかさねて、いまでは、それができるようになっていました。

玉村さんのへいの外で、金色のトラにであつたのは午後八時ごろでしたから、いまはもう、真夜中です。ニコラ博士や、その手下のやつらは、もうねてしまったのでしよう。耳をすますと、シーンとしずまりかえつていて、なんのもの音もありません。小林君は、にげるのは、いまだとおもいました。

かぎのようになつた針金を、錠前の穴にいれて、しずかにまわしますと、カチツと音がして、錠がはずれました。

そつと鉄ごうしのとびらをひらいて、外に出ると、もとのとおりにしめて、針金で、かぎをかけました。

あとで、小林君がいなかったことがわかつて、錠前はもとのとおりに、しまっているのですから、どうして出ていったかわからないので、びっくりするにちがいありません。こんどは、小林君のほうに魔法つかいになつたわけです。

廊下のところどころに、小さな電灯がついているばかりなので、ひどくうすぐらいのです。どちらへいけば、外に出られるのか、まるで、けんとうもつきません。

小林君は、まず右のほうへいつてみることにして、壁をつたうようにして、しずかに歩いていきました。

もしこのとき、小林君が右ではなくて左のほうへいったならば、そこに、じぶんがいれられていたのおなじような、鉄ごうしの牢屋が、いくつもならんでいて、その中に、玉村銀一君などが、とじこめられているのを、みつけだしたでしょうが、そのときは、ほんたいの方角へ、歩いていったのです。そして、そのかわりに、もつともつとおそろしいことに、ぶつかってしまったのです。

三重の秘密室

そこは、秘密の地下室ですから、コンクリートをながしこんだばかりの、ザラザラの灰色の壁がつづいています。

小林君は、足音をしのばせながら、その壁をつたって、おくへおくへと、すすんでいき

ました。うすぐらい廊下には、ところどころに、ドアがしまっています。ドアにでくわすたびに、そこに耳をつけるようにして、中のもの音をきこうとしましたが、人がいるのか、いないのか、なにもきこえません。

音のしないドアを三つすぎて、四つめにちかづきますと、ボソボソと、だれかの話し声
がもれてくるではありませんか。

かぎ穴に目をあててみると、中には、あかあかと電灯がついていて、いすにかけた人の、うしろ姿が見えます。ひとりではありません。二―三人の人間が、テーブルにむかいあつて、話をしているらしいのです。

「ぼくたちは、みょうなことから、先生の弟子になりましたが、先生の魔法の力には、まったくおどろいてしまいました。そっくりおなじ人間を、いくらでも、こしらえることができるなんて、人間の知恵ではありません。神さまか、悪魔の知恵です。あの三重の秘密室の中には、いったい、どんなしかけがあるのですか。」

手下の男の声です。「三重の秘密室」とは、なにをさすのでしょうか。

読者諸君は、この地下の牢屋が、二重の秘密室であることを、ごぞんじでしょう。玉村銀一君がニコラ博士にかどわかされたとき、まず地下室の物置きにはいり、その壁のボ

タンをおして、二重の秘密室にはいったのでした。そこまではわかっています。しかし、「三重の秘密室」が、どこにあるかは、まだわかりません。たぶん、二重の秘密室の、もうひとつおくの、秘密室なのでしょう。

その「三重の秘密室」には、手下の男たちも、はいったことがないらしく、その中に、どんな秘密があるのかと、きいているのです。

「それは、まだいえない。いつかは、きみたちにもおしえるときがくるだろうが、いまはいえない。そこには、わしの魔法の種が、かくしてあるのだ。

ともかく、そこからは、ほんものとそつくりのにせものが、うまれてくる。いくらでも、うまれてくるのだ。」

「では、先生は、ほんものと、にせものと、人間のいれかえをやって、なにをしようというのですか。」

「それは、きみたちも、知っているじやないか。まず宝石展覧会をひらくのだよ。にせの玉村銀之助にひらかせるのだ。玉村の信用で、日本全国の宝石があつまってくる。それをひとばんのうちに、にせ宝石といれかえて、ほんものはぜんぶ、わしがちようだいするのだよ。」

ニコラ博士の声です。この宝石展覧会のたくらみも、読者諸君は、とつくに、ごぞんじのほずですね。

「宝石を手にいれたら、そのつぎには美術品ですか。」

また、べつの声がたずねます。

「そのとおり。だが、これは宝石みたいなのに、ぜんぶ一カ所にあつめるというわけにはいかん。まず美術商のもっているものからはじめて、それから、各地の博物館や、お寺の宝ほうも物などに手をのばしていく。

美術商の主人を、わしのつくつたにせものといれかえ、博物館の館長や館員を、にせものといれかえ、お寺の坊さんを、にせものといれかえれば、美術品をぬすみだすなどわけもないことだよ。ウフフフフ……。」

ニコラ博士が、うすきみわるく笑いました。

「それでおしまいですか。先生の魔法でなら、どんなことだって、できないことはないようにおもわれますが。」

「たとえば？」

ニコラ博士は、弟子たちの知恵をためしでもするかのようになり、ききかえしました。

「たとえば、ある国を、のつとることも、かんたんにできるでしょうし、また、ある国をほろぼすこともできるでしょう。」

「ふーん、きみは大きなことを、かんがえているね。では、ある国をのつとるには、どうすればいいんだね。」

ニコラ博士は、自分はよく知っているけれども、あいてに、しやべらせてみようというようなちようしで、たずねます。

「それは、その国の総理大臣や、政党の首領などを、にせものといれかえればいいのです。そうすれば、その国のことは、いつさい、にせものの、おもうままになるじやありませんか。」

ある国をほろぼすのも、おなじことです。にせものの総理大臣や、政党の首領や、軍隊の長官が、めちやくちやをやれば、その国は、たちまち、ほろんでしまいます。」

「なるほど、だれでもかんがえることだね。わしの魔法の力によれば、どんな大きなことだつて、できないことはない。わしは世界をかえてしまうことができる。世界をてんぷくさせることができる。また、ナポレオンのように、世界を征服することもできる。」

もつとおそろしいことをいうならば、にせものの力で、原水爆の秘密をぬすむこともで

きるし、また、にせものによって、ふいに原水爆を爆発させることだってできるのだ。

人間のにせものを、自由に、うみだす力をもっているわしの字引きには、
“できない”
ということばはないのだ。

わしはいま、日本の宝石と美術品をわがものとするために、この魔力をつかおうとしているが、そのつぎには、日本そのものを、ぬすむかもしれない。いや、世界をてんぷくし、世界をぬすむかもしれない。もつとちがったいいかたをすれば、地球全体を、わしのものにしてしまうかもしれない。」

ニコラ博士は、うちょうてんになって、じぶんの魔力をじまんするのでした。

小林君は、この会話を立ちぎきして、心の底からおどろいてしまいました。

いかにも、だれのにせものでも、自由につくりだす力があれば、全世界をぬすむことだって、できないことはありません。ああ、なんというおそろしいことでしょう。

それにしても、その魔法の種のかくされている「三重の秘密室」というのは、いったい、どこにあるのでしょうか。

小林君は、なんとかして、その「三重の秘密室」にはいりたいとおもいました。

こんきよく、ニコラ博士をつけまわしていれば、いつかは、その秘密室にはいるにちが

いありません。小林君は、あいてにさとられぬように、ニコラ博士を見はつてやろうと考
えました。

それには、ゆつくりことをはこぼかはありません。このまま牢屋をからつぽにしてお
いては、にげだしたことを気づかれ、あいてを用心させてしまいますから、ひとまず、牢
屋にもどらなければなりません。小林君は、針金のかぎで錠をひらいて、もとの牢屋の中
にはいりました。

地下室には、夜も昼もありませんが、ニコラ博士の手下が食事をはこんでくるので、だ
いたいの時間がわかります。三度の食事がすめば、夜になり、見まわりも、とだえますの
で、それをまつて、こつそり牢屋をぬけだし、ニコラ博士をみはることにしました。

小林君は、ニコラ博士の寢室をみつけたいとおもいました。なんとなく、寢室のどこか
に、「三重の秘密室」への通路が、かくされているようにおもわれたからです。

やつと博士の寢室がみつかりました。おなじ地下室の一方のすみにある、小さな部屋で、
ベッドと、つくえと、たんすがおいてあり、ニコラ博士は、その部屋で、ひとりで寝るこ
とがわかりました。

ところが、この寢室に、ふしぎなことがおこつたのです。

小林君がとらえられてから三日めの夜のことでした。ニコラ博士の寝室がわかったので、廊下のまがりかどにかくれて、そのほうを見はつてみますと、ニコラ博士が寝室へはいつていくのが見えました。

あとから、だれかくるといけないので、しばらく、ようすを見てから、寝室の前にいき、ドアのかぎ穴から、そつとのぞいてみますと、寝室の中には、人のけはいもありません。ベッドの半分と、机と、いすが見えています。そこにはだれもいないのです。かぎ穴から、部屋のぜんぶが見えるわけではありませんけれど、なんとなく、からつぽのかんじがするのです。

小林君は、おもいきつて、そつとドアをひらいてみました。だれもいません。部屋の中へはいつて、ベッドの下、机の下、たんすのうしろなどを、のぞいてみました。やつぱり、だれもいません。

ふしぎです。ニコラ博士が、この寝室にはいつて、ドアをしめてから、ずっとドアを見ていました。博士が出ていけば、気がつかぬはずはありません。

壁か床に、秘密のぬけ穴でもあるのではないかと、さがしまわっていますと、どこからか、ドドドド……と、地ひびきのような音がきこえ、寝室ぜんたいが、かすかに、ふるえ

ているようなかんじがします。

地震かとおもいましたが、どうもそうではなさそうです。

そのうちに、ギョツとするようなことに気がつきました。

しまっている入口のドアが、グングン下へさがっていくのです。というのは、つまり、部屋の床が、上へ上へと、あがっていくことなのです。

そのうちに、下へさがっていったドアが、すっかり見えなくなったかとおもうと、こんどは、上のほうから、べつのドアがさがってくるではありませんか。ドアだけではなく、壁もいっしょに、さがってくるのです。

ああ、わかりました。このニコラ博士の寝室は、部屋ぜんたいが、エレベーターのしかけになっているのです。ドアがさがったのではなくて、部屋そのものが上にあがり、一階上のドアと、ピッタリ合うところで、とまったのです。

箱の中

この寝室は、まったくおなじ部屋が、上と下に二重にくっついているのです。

ニコラ博士がいったのは、下の部屋でした。それがエレベーターのしかけで、下へおりていって、小林君がしのびこんだときには、いつのまにか、上の部屋とかわっていたのです。

ですから、そこに博士の姿が見えなかったのは、なんのふしぎもありません。そのとき博士のいる寝室は、地下室のもう一つ下の地下室、つまり地下二階へおりていって、小林君がしのびこんだのは、それとそっくりおなじにできている、上のほうの部屋だったのです。

ニコラ博士は、寝室全体のエレベーターを、下におろして、地下二階へおりていったのにちがいありません。しかし、そこには、いったい、なにがかくされているのでしょうか。これほど大じかけな、秘密の出入り口をつくって、だれもはいれないようにしてあるところを見ると、この地下二階には、よほどの秘密が、かくされているのにちがいありません。

小林君は、それを考えると、なんだか、からだじゅうの、うぶ毛が、ゾーツとさかだつてくるような、いうにいわれないおそろしさをかんじました。

小林君のはいった部屋は、地下一階から、一つ上にあがったのですから、いまいるところ

ろは、一階にちがいません。

小林君は気がつきませんでした。この部屋は、エレベーターじかけで、下におりても、地下一階までしかおらないのですから、いつまでこの部屋にいても、地下二階の秘密をさぐることはできないと、気がついたのです。

ですから、いま、この部屋のドアをひらいて、一階に出て、ふつうの地下室におり、あの壁のボタンをおして、秘密の出入り口から、地下一階におり、ニコラ博士の寝室にしるびこむほかはありません。つまり、この部屋の真下にある、そっくりおなじ、もう一つの部屋にいくのには、そうするほかはないのです。

そのみちで、ニコラ博士の部下にみつかってはたいへんです。小林君は用心のうえにも用心をして、廊下から、廊下へと、しのび歩き、地下室の入口をみつけて、そこにおり、がらくたものがおいてある、つきあたりの部屋の壁のボタンをおして、地下一階におり、ニコラ博士の寝室へ、たどりつきました。

上下に二つつながっている、おなじ部屋の上のほうを出て、大まわりをして、下のほうの部屋まできたわけです。

かぎ穴からのぞいてみますと、だれもいません。ニコラ博士は、地下二階におりて、用

事をすませ、地下一階にもどつて、部屋を出ていったのでしよう。ドアにはかぎがかかっていました。

小林君は、また、針金をいろいろにまげて、錠前やぶりをしなければなりませんでした。五分ほどかかつて、やっとドアがひらきました。部屋にはいつてドアをしめ、ベッドの下や、たんすのうしろなどを、よくしらべましたが、どこにも人間がかくれているようすはありません。

小林君は、もう一度、この部屋を地下二階におろして、その秘密をさぐりたいと思いましたが、どうすれば、下におりるのかわかりません。どこかに、スイッチか、おしボタンがあるのでしようが、それをさがすのがたいへんです。

しかし少年探偵の小林君は、こういうことになれていました。かくしボタンなどは、どういう場所をさがせばいいか、いままでのたくさんの経験で、だいたいわかっているのです。

それでも、かくしボタンをみつけるのに、八分ほどかかりました。入口のドアには、中から針金で、かぎをかけておいて、さがしまわったのですが、ふいに、だれかがやってきやしないかと、気が気ではありません。

でも、うまいぐあいに、かくしボタンがみつかりました。ベッドの下のジュウタンの一カ所が、プクツと小さくふくれているのに気づいて、足でふんでみますと、それがかくしボタンでした。やにわに、部屋全体が、ブルブルふるえだしたのです。つまり、エレベーターがおりはじめたのです。

やがて、エレベーターがとまるのをまつて、小林君は、針金のかぎで、ドアをひらき、そつと地下二階の廊下へふみだしました。

どこかに電灯はついているのですが、ひじょうにうすぐらくて、あたりのようすが、よくわかりません。

どこからか、つめたい風が、スーツとふいてきました。幽霊の手で顔をなでられたような気持です。小林君は、ブルブルツと、身ぶるいして、そこに立ちすくんでしまいました。なんともいえないぶきみさです。人間界をはなれて死の国にはいつてきたような、ふしぎなおそろしさです。

ここには、いったい、どんな秘密が、かくされているのでしょうか。それを考えただけでも、心臓がドキドキしてきます。

そのうちに、目がなれてきて、あたりが見えるようになりました。

コンクリートの壁、コンクリートの床、なんのかぎりもない灰色の廊下が、つづいていきます。おっかなびつくりで、その廊下を、たどっていきますと、やがて、両がわに、たてにながいのロッカーが、ズラツとならんでいるところにきました。

ロッカーににているけれども、ふつうのロッカーよりは、幅が広く、人間ひとり、じゅうぶんはいれるほどの大きさで、なんだか、気味のわるいかつこうをしています。まるで、かんおけをたてにして、ならべたようなかんじです。

このふしぎなロッカーは、両がわに、あわせて三十個ほどならんでいましたが、そのとびらには、小さいネーム・プレートがついていて、エナメルで、ローマ字と数字とが、T 1、T 2、S 1、S 2、A 1、A 2などと書いてあるのです。

小林君は、すぐ目の前のT 1のとびらをひっぱってみましたが、かぎがかかっているとみえて、ひらきません。かぎがかけてあるからには、中になにかだいいじなものがいれてあるのでしょうか。

それはなんででしょうか。こんなところに、ふつうのロッカーがあるはずはありません。その中にオーバーなんかがいっているとは考えられないのです。

では、なにがはいっているのでしょうか？

小林君は、なぜか、ゾーツと、からだがさむくなるような気がしました。針金を使えば、とびらをひらくのは、わけはありません。しかし、とびらをひらくのが、なんだかこわいのです。

でも、とうとう決心をして針金のかぎで、そのTと書いてある、ロッカーのような箱のふたをひらきました。ひらいたかと思うと、

「あつ！」

とさけんで、まつさおになって、ピシヤンとふたをしめてしまいました。

そこには、なんだか、へんなものがいたのです。気味のわるいものが立っていたのです。それは人間でした。しかも小林君のよく知っている少年でした。

玉村銀一。そうです。少年探偵団員の玉村銀一君とそっくりの少年が立っていたのです。銀一君が、どうして、こんな箱の中にとじこめられているのでしょう。こうして立たされては、足がつかれてしまうでしょうし、ピツタリふたがしめてあるので、息もできないでしょう。じつにおそろしいごうもんです。

しかし、どうもへんです。小林君と顔を見あわせたとき、銀一君は、なにもいわないで、じつと立っていました。「小林さん」とさけんで、とびだしてくるはずではありませんか。

それとも、銀一君は、立ったまま、気をうしなっているのでしょうか。

大秘密

小林君は、勇気をだして、もう一度箱のふたをあげてみました。

やっぱり、玉村銀一君です。いつも着ている服を着て、正面をむいたまま、まばたきもしないで、立っています。

「玉村君、きみは、玉村銀一君だね。」

声をかけても返事もしません。こちらの顔を見ようともしません。

小林君は、銀一君の腕に手をかけてゆすぶってみました。すると、銀一君のからだは、ユラユラとゆれたのですが、そのゆれかたがへんでした。

それは人間ではなくて、人形だったのです。プラスチックでできた人形だったのです。じつによくできていました。銀一君にそっくりです。

気がつくど、人形の立っている足の下にひきだしが一つついていました。

それをあけてみますと、中に写真がたくさんはいつているのです。

みんな玉村銀一君の写真です。顔と全身を、前から、うしろから、横からと、あらゆる角度からとったものです。

ああ、わかりました。これらの写真をもとにして、この人形をつくったのです。これだけたくさんの写真があれば、銀一君とそっくりの人形をつくることもできるでしょう。

だが、なんのために、こんな人形をつくったのでしょうか。そこがどうもよくわかりません。

小林君は、ふと、みようなことを考えました。超人ニコラ博士はにせものをつくったあとで、ほんもののほうは、人形にしてしまったのではないかということです。魔法つかいのニコラ博士にとつては、人間を人形にかえてしまうぐらいはわけのないことでしょう。

この、ロッカーみたいな箱の中には、ほかに、たくさんの人形がはいっているのかもしれない。小林君は、いよいよ、気味がわるくなってきましたが、勇気を出して、針金のかぎで、つぎのT2のふたをひらいてみました。

その中には、美しい女の子が立っていました。まだあったことはないけれども、銀一君のねえさんの光子さんかもしれません。光子さんもせものにかわっているらしいことは、玉村銀之助さんからきいていました。

そのつぎには、T3というふたをひらいてみました。

「おやっ、銀一君のおとうさんまで！」

そこに立っているのは、たしかに宝石王の玉村銀之助さんでした。

「すると、このあいだ銀座の店であったのは、にせものだったのかしら。」

小林君は、小首をかしげました。あれがにせものだったとは、どうにも考えられないのです。

そうです。あのとときの玉村さんは、まだほんものでした。読者諸君は、よく知っています。玉村さんが、にせの小林少年のために、大時計の箱にとじこめられたのは、あれよりあとのことでした。

小林君が、このロッカーのような箱の中を見ているときには、まだにせものどのいれかえは、すんでいませんでしたが、人形のほうは、もうちゃんとできていたのです。

小林君は、こうなったら、みんな見てやろうと、どきようをきめました。

そして、つぎにひらいたのは、T4のふたです。そこには、三十五―六歳の女の人立っていました。小林君はあつたことがありませんが、これは銀一君のおかあさんらしいのです。

「おやおや、おかあさんまで、にせものといれかえるつもりだな。」

小林君は、思わず、つぶやきました。これで玉村さんの家族はぜんぶです。ニコラ博士は、玉村家の人をみんなにせものといれかえて、玉村家をのつとつてしまうのでしょうか。それを考えると、怪博士の、あまりの悪だくみに、小林君は、心の底から、ふるえあがってしまいました。

こんどはS1のふたです。それをひらくと、銀一君よりはすこし大きい少年が立っていました。むろん人形です。小林君は知りませんでした。これは白井美術店の子どもの白井保君です。

つぎのS2の箱には、保君のにいさんの人形が、S3、S4と、ひらくにつれて、保君のおとうさんをはじめ、白井家の人たちが、ズラツとならんでいるのです。小林君はその人たちを、ひとりも知りませんが、じつは、白井美術店の主人の家族ぜんぶが、そこに人形にされていたのです。

ニコラ博士は、こうして、玉村宝石店をのつとつたのとおなじように、白井美術店のつとろうとしているのにちがいありません。

そのつぎにはA1のふたをあけてみました。針金をカチカチやって、なんの気なしに、

そのふたをひらいたのですが、ひらくと同時に、小林君は、目をまんまるにして、立ちすくんでしまいました。

ああ、なんということでしょう。その箱の中には、もうひとり小林少年が立っていたではありませんか。顔もおなじ、服もおなじ、まるで鏡にでもうつったように、ふたりの小林君が、むかいあつて立っているのです。

小林君は、おどろいてしまいました。じぶんとそっくりのやつが、こっちをにらみつけているのです。小林君は、こわい目をして、相手をにらんでやりました。しかし、人形は、いつこうにへいきです。そしてながいあいだ、小林君と小林君との、ふしぎなにらみあいがつづきました。

小林君が牢屋にいれられたとき、ニコラ博士がやってきて、

「きみのにせものが、外ではたらいっている。そのあいだ、ほんもののきみは、ここにとじこめておくのだ。」

といました。では、この人形が、そのにせものなのでしょうか。

いや、そうではありませんまい。にせものは、どこかで、生きて動いているはずです。すると、この人形は、なんのために、つくられたのでしょうか。

小林君は、しばらく考えていましたが、やがて、そのわけがわかりかけてきました。

「ああ、そうだ。まずぼくの写真をあつめたにちがいない。ぼくの知らないまに、だれかがとつたのだ。」

ねんのために、人形の足の下のひきだしをあけてみますと、小林君の写真が何十枚もはいつていました。顔だけのもの、全身のもの、前から、うしろから、横からと、あらゆる方角からとつた写真がたくさん出てきたのです。

「この写真をもとにして、プラスチックの人形をつくつたのだ。この人形が、いわば原型なんだ。そして、なにかの魔法で、原型のとおりの、生きた人間をつくりだすのだ。」

つまり、ほんとうのぼくと、人形とにせもののぼくと、三人のぼくがいるわけだな。」

小林君は、そう考えて、ひとり、うなずくのでした。

「じゃあ、つぎのA2の箱には、だれがはいつているのだろう。」

やっぱり、あけてみないではいられません。

小林君は針金でかぎ穴をカチカチいわせて、そのふたをひらきました。

「あつ、先生！」

とんきような声をたてたのも、むりはありません。そこには、名探偵明智小五郎が、に

こやかにほほえみながら立っていたのです。

むろん人形です。足の下のひきだしをひらいてみると、やっぱり、明智先生のいろいろな写真が、どっさり、そろっていました。

「すると、あいつは、明智先生のにせものも、つくる気なんだな。」

小林君は、なんだかこわくなってきました。明智先生は、まだ北海道からおかえりにならないが、ひよつとしたら、旅さきで、とつくに、にせものとかわっているのではないだろうかと思うと、ゾーツとしないではいられませんでした。

小林君は、それから、つぎつぎと、箱をひらいてみましたが、あとには、見知らぬ人形が五つほど、はいっていたばかりで、そのほかの箱は、ぜんぶからっぽでした。これから、べつの人形をいれるために、のこしてあるのでしょうか。

小林君は、人形箱を見てしまうと、つぎの秘密が、知りたくなりました。これらの人形をもとにして、どうして、にせの人間をつくるのか、その秘密が、やっぱり、この第三の地下室の中に、かくされているにちがいないのです。

ロッカーのような人形箱のなんだ、せまい廊下を、まっすぐにいきますと、そのつきあたりに、がんじょうなドアが、しまっていました。

ドアに耳をつけてみましたが、なんのものの音もせず、シーンと、しずまりかえっています。

かぎ穴からのぞいてみました。

あつ、なんとというあかるさ！ まるで、まっぴるまの原っぱのようです。しかし、そこは地下二階ですから、太陽の光がさしているはずはありません。やっぱり電灯でしょう。おそろしくあかるい電灯が、部屋じゅういっぱい、かがやいているのです。

小林君は、また針金のかぎを、使いました。すこしてまどりましたが、とうとうドアがひらき、小林君は、広い部屋の中に、ふみこみました。

そして、おどろきのあまり、あつと、たちすくんでしまいました。

そこは、絵でも写真でも、一度も見たことのないような、ふしぎな機械の部屋でした。あらゆる形の機械が、部屋じゅうに、みちあふれているのです。

いっぽうには、手術台のようなものがあり、そのそばのガラス戸だには、キラキラひかるメスやハサミや、そのほかさまさまのおそろしい道具が、いっばいにならんでいます。

いっぽうには、歯科医の治療台のようなものが、いくつもならび、また、べつのすみに

は、大きな化学の実験台があつて、その上に、あらゆる形のガラスの道具がならび、ガスの炎ほのおの上の、まるいガラスビンの中には、血のような液体が、フツフツとあわだっているのです。

あつ先生つ！

小林君は、びつくりして、たちすくんでいましたが、すると、むこうの機械のあいだから、みょうな人間が、あらわれてきました。

頭は、かみそりできれいにそつた、まるぼうずです。顔はしわだらけで、ひろいひたいの下に、まんまるな目がギョロツと、ひかつています。

まゆ毛は、ひどくうすいので、あるのかわかりません。ひらべったくて、ペシヤンコの鼻、その下に、大きな赤いくちびるが、まるで虫のように、モグモグうごいています。

服は青いもめんの労働服で、その上にまっ白な手術着のようなものを、はおっています。子どものように背がひくくて、その胴体の上に、じいさんの首がのつているという、ふ

しぎな人間です。一寸法師いっすんぼうしという、かたわものなのでしよう。

そいつは、ニヤニヤわらいながら、こちらへちかづいてきました。そして、まったくちびるを、大きくひらいて、こんなことをいいました。

「おお、よくきた。おまえは、わしのつくったA1号だな。」

そして、つくづく小林君の顔を、ながめながら、

「うん、よくできた。A1号の写真とそっくりじゃ。だれも、おまえを見やぶるものはあるまいて。ウフフフフ、おまえは、わしの傑作じゃよ。」

小林君は、しばらくかんがえていましたが、やがて、一寸法師のいっていることが、わかってきました。A1号というのは、あの小林君とそっくりの人形が、はいていたロッカーの番号です。

まず小林君のいろいろな写真をあつめ、それによってあの人形をつくり、その原型から、小林君とそっくりの生きた人間を、つくりだしたのに、ちがいません。

しかし、どうして、そんなことができるのでしょうか。このぶきみな一寸法師は、魔法つかいなのでしょいか。

超人ニコラ博士は、どんな人間にも、ばけることができます。では、この一寸法師も、

やはりニコラ博士の、べつの姿ではないのでしょうか。

「あなたはニコラ博士ですか。」

小林君は、そうたずねてみました。

「わしはニコラではない。」

一寸法師がこたえました。

「では、あなたはだれです。」

「さあ、だれじやったか。わしはわすれたよ。」

なんだかへんです。この一寸法師は、自分がだれだったか、忘れてしまったといっているのです。

「あなたは、ぼくをつくったといいましたね。どうして、そっくりおなじ人間が、つくれるのですか。あなたは魔法つかいですか。」

小林君は、そんなことをたずねないではいられませんでした。すると、一寸法師は、大きな口をあいて、歯のない歯ぐきを見せて、うすきみわるく、わらいました。

「ウフフフフ、魔法つかいか。そうじや、魔法つかいといってもいい。だが、わしは医者だよ。魔法のような医術をつかうのじや。医術によって人間をつくりかえるのじや。つ

まり、わしは世界にたったひとりしかいない魔法医者なのじゃ。」

小林君は、そんなばかなことができなものかとおもいました。この一寸法師は、とんでもないホラふきか、気がいか、どちらかにちがいありません。

「ウフフフ、みような顔をしているね。きみは、わしの手術をうけたことを、わすれてしまったのか。よろしい。それじゃあ、きみにあわせる人がある。きみはたしか、名探偵明智小五郎の助手じやつたね。ちようどいい。まあ、こちらへきて見るがいい。」

一寸法師のみじかい手が、小林君の手をにぎって、グングンむこうへ、ひっぱっていくのです。ゴチャゴチャした機械のあいだをとおっていきますと、白い手術台のならんだところへ出ました。

一つの手術台に、だれかがよこたわっています。モジャモジャにみだれた髪の毛が見えています。

「もう麻酔がさめたころだ。きみ、気分はどうだね。」

一寸法師が、ねている人の顔を、のぞきこんで、はなしかけました。

すると、その人はパツチリ目をひらいて、ふしぎそうに、あたりを見まわしています。

「あつ、先生！」

小林少年は、とんきような声をたてて、手術台にかけられました。

そこにねていたのは、名探偵明智小五郎だったのです。いや、明智探偵とそっくりの間違ったのです。

ほんとうの明智探偵は、まだ北海道からかえりません。こんなところにねているはずはないのです。

これは、A2という番号のロッカーの中にあつた、明智とそっくりの人形をもとにして、一寸法師の魔法医者が、つくりだした人間にちがいありません。

そこにねている明智探偵は、小林君が「先生つ」とさげんで、ちかづいても、べつにおどろくようすもなく、知らん顔をしています。にせものですから、まだ小林君を知らないのです。

「A2号ですね。」

小林君が、ニヤツとわらつていました。すると一寸法師は、

「そうじゃよ。つまり、明智探偵がふたりになつたというわけさ。」
とこたえました。

「人形もいれると三人ですね。」

「ウフフフ、そうじゃ、そうじゃ。おまえ、なかなか、かしこいのう。」
そういって、一寸法師は、みじかい手で、背のびをしながら、小林君の頭をなでるのでした。

一寸法師は、からだのかっこうが、へんなばかりでなく、いうことも、なんだかおかしいのです。気持ちがいかもしれません。しかし、気持ちがいに、どうして、こんな人間製造ができるのでしょうか。じつに、ふしぎというほかはありません。

小林君が、なおも質問しようとしていますと、そのとき、部屋の入口のほうに、人の足音がして、だれかが、こちらへやってくるようです。

小林君はびつくりして、機械のかけに身をかくして、そのほうをながめますと、白ひげのニコラ博士が、こちらへやってくるのが見えました。

みつかつては、たいへんです。小林君は、あわてて、機械と機械のすきまを、おくふかく、にげこむのでした。

さて、それから、どんなことがあったか。小林君は、ニコラ博士にみつかることもなく、ながいあいだ、その機械室において、一寸法師の魔法医者秘密を、すっかりききだしてしまいました。

それから三日のあいだに、小林君は、ニコラ博士の洋館のすみずみまで、のこるところなく、しらべあげました。

地下一階の牢屋のような鉄ごうしの中にとじこめられた、玉村宝石王一家、白井美術店一家の人たちとも、こつそり話をして、すべての事情を知ることができました。

それだけでなく、小林君は、いかにも明智探偵の弟子らしい、おもしろいトリックを考えついて、それをやってみることにしました。

そのトリックとは、いったい、どんなことだったのでしょうか。

いや、それよりも、一寸法師の魔法医者は、どのような方法によって、同じ人間をつくりだすことができたのでしょうか。

三方からピストルが

お話かわつて、こちらはほんものの明智探偵です。小林君がニコラ博士にとらえられてから一週間ほどのち、明智探偵は北海道の事件をしゅびよく解決して、その日の午後、羽ねだ田空港につきました。

電報がうつてあつたので、小林君が自動車でむかえにきていました。そして、小林君と、もうひとり、三十歳ぐらいの見知らぬ男が、探偵のそばへよってきました。

「先生、おかえりなさい。事件がうまくかたづいたそうで、おめでとうございます。」

小林君があいさつをしますと、明智もニコニコして、

「うん、ありがとう。……で、その人は？」

と、見知らぬ男を目でさししめして、たずねました。

「こんどたのんだ先生のボディガードです。くわしいことは、あとでおはなしします。

先生、こちらにも、ふしぎな事件がおこっているのです。先生のおかえりをまちかねていました。」

「そうだってね。おもしろい事件らしいじゃないか。」

「ええ、これまで一度も手がけたことのない、ふしぎな事件です。事務所へかえってから、ご報告します。」

そして、三人はまたせてあつた自動車にのりこみました。小林君が右がわに、見知らぬ男が左がわに、明智探偵を中にはさんで、こしかけたのです。

運転手も見かけたことのない男です。明智はちよつと、へんに思いましたが、車は事務

所専用の「アケチ一号」ですし、小林君がついているので、べつに、ふかくもうたがいま
せんでした。

車は京浜国道を三十分もはしつたかとおもうと、さびしい横町へまがりました。

「道がちがうじゃないか。」

明智探偵が、そういつて、思わず腰をうかそうとしました。ハツと危険をかんじたから
です。でも、小林君がいるのに、こんなみようなことがおこるのはなぜだろうと、ふしぎ
に思いました。

ところが、明智が腰をうかしたときには、右手は小林君に、左手は見知らぬ男に、かた
くにぎられて、うごきがとれなくなっていました。

「ぼくをどうしようというのだ。小林君、きみまでが……。」

ときけんで、小林少年の顔をにらみつけますと、おどろいたことには、その小林君が、ふ
てぶてしくわらいながら、こんなことをいうではありませんか。

「ウフフフ、よくにているだろう。だが、おれは小林じゃないのさ。小林とそっくりの
別の人間なのさ。ほんとうのことをいうとね、おれたちはみんな、超人ニコラ博士の手下
なのさ。おっと、明智先生が、いくらつよくつてもだめだよ。こちらには、これがあるん

だからね。」

と、いったかと思うと、小林君によく似た少年と、見知らぬ男とが、左右からピストルをつきつけ、運転手も車をとめて、うしろをふりむくと、右手をグツとこちらに出して、やっぱりピストルを、さしむけるのでした。

こうして明智探偵は、目かくしをされ、さるぐつわをはめられ、両手をうしろにしばらくして、もう、身動きもできなくなっていました。

それから、また四―五十分もはしって、車がついたのはニコラ博士の怪洋館でした。

明智探偵は三人につれられて、地下室から、第二の秘密室へ、そして鉄ごうしの牢屋の中へ、ほうりこまれてしまいました。

替え玉の替え玉

明智探偵が牢屋へいれられて、しばらくすると、白ひげのニコラ博士が、ゆうぜんと、地下室の見まわりにやってきました。そのうしろから、さっきの小林君によく似た少年が、したがっています。

玉村宝石店の親子四人がとじこめられている鉄ごうしのまえを、とおりすぎました。かわいそうに、四人のものは、部屋のすみにうずくまって、だまって、うなだれています。そのむかいがわには、白井美術店の家族が、とじこめられ、おなじようにうなだれています。

それから十メートルほどむこうに、小林少年のいる牢屋があります。ニコラ博士とせの小林君が、そのまえをとおりかかると、鉄ごうしの中から、おそろしい声がひびいてきました。

「ニコラ先生、おれをここから出してください。おれはにせもののほうだ。そこにいるのが、ほんものの小林だ。小林がおれをここへとじこめて、じぶんはにげだしてしまったのだ。そして、にせものになりすましているのだ。」

ニコラ博士は、それをきいても、べつにおどろきません。小林君から、わけを知らされているからです。

「ね、そうでしょう。さすがは小林の知恵です。うまいことを考えました。ほんとうの小林が、どうかして鉄ごうしをあけて、にせものを引きいれ、替え玉の入れかえをやったというのです。だから、じぶんを牢から出して、かわりに、ぼくを入れようというのですよ。」

しかし、あいつはうそをついているにきまっています。なぜと行って、ほんものの小林は、あいかぎを持つていないので、牢から出られっこないのですからね。かぎは、このにせの小林が、ちゃんとこうして、もっているのですからね。」

牢屋の外の小林は、そういつて、ポケットからかぎたばをとりだし、チャラチャラと音をさせてみせました。

へんなことになってきました。ニコラ博士は知りませんが、読者諸君は知っています。小林君は、針金をつかつて、じゆうじぎいに、鉄ごうしの錠をあけることができます。それを、牢屋の外にいる小林君は、あいかぎがなければ、あけられないなどと、うそをついているではありませんか。

牢屋の中にいる小林よりも、外にいる小林のほうが、あやしいのではないのでしょうか。つまり、中の小林が、じつはにせもので、外の小林がほんものではないのでしょうか。なんだかややこしいことになってきました。

しかし、もし、外にいる小林がほんものだとすると、明智探偵を自動車にのせて、とりにし、この地下室の牢屋へ入れたのは、どういうわけでしょうか。ほんものの小林君なら、あくまで明智探偵のみかたをするはずではありませんか。

なんだかわけがわからなくなってきました。もうすこし、ようすを見ることにしましょう。そうすれば、やがてハッキリしたことがわかるでしょう。

さて、ニコラ博士と小林君とは、牢屋の見まわりをすませて、一階へあがっていきましたが、しばらくすると、こんどは、小林君だけが、こっそり地下室へおりてきました。そして、あの小林の牢屋の前をとおりかかると、またしても、中から、どなり声がきこえてきました。

「やい、そこへいくほんものの小林。うまく博士をごまかしたな。だが、きさまのうそが、いつまでもつづくはずはない。きつとそのうちに、見やぶられる。そのときは、どんなひどいめにあうか、かくごしているがいい。おれはきつと、きさまといれかわってみせるぞつ。」

中の小林は、鉄ごうしにすがりついて、ガタガタいわせながら、しきりに、どくぜつをたたいています。

外の小林君は、それをあいてにしないで、牢屋の前を通りすぎ、ニコラ博士の寝室へしびこみました。ここのかぎだけは、ニコラ博士がはなしませんので、小林君は、やっばり、針金をつかってドアをひらかなければなりませんでした。

小林君は、エレベーターのかくしボタンをおして、地下二階へおり、A2のロッカーから、明智探偵とそっくりの人形をとりだし、それをこわきにかかえて、もとの地下一階にもどり、さつき明智探偵をとじこめた牢屋へといそぎました。

エレベーターから、明智の牢屋へ行くのには、ほかの牢屋のまえをとおらなくてもよいので、人形をだいているのを、気づかれる心配はありません。

その鉄ごうしのまえへいくと、明智探偵は部屋のまんなかにすわって、おそろしい顔で、こちらをにらみつけていました。

小林君は、鉄ごうしに顔をくつつけて、ささやきました。

「先生、ぼくはほんとうの小林です。ぼくは一度牢屋へいれられたのですが、そこをぬけだし、うまくだまして、にせものと入れかわったのです。そして、ぼくは、ニコラ博士のみかたのにせものになりましたのです。つまり替え玉の替え玉になったわけです。

さつきは、先生にピストルなどむけて、ごめんなさい。ああして、にせもののように見せておかないと先生をおたすけすることができないからです。

ニコラ博士は、ぼくをにせものと信じていますから、ぼくに牢屋のかぎをはずけました。ですから、この鉄ごうしをひらくのは、わけもないのです。」

小林君は、そういいながら、かぎたばをとりだして、鉄ごうしのドアをひらき、中へはいつて、部屋のおくにしいてあるごぎの上に、いまもってきた明智探偵とそっくりの人形をよこたえ、もう一枚のごぎを、胸のへんまでかけました。こうしておけば、外から見たのでは、明智探偵がねているとしか思えませんから、ほんとうの明智がにげだしてしまつても、しばらくはだいじょうぶです。

「さあ、先生、にげましょう。とちゆうで、だれかに見つかるみたいへんですから、そういうときには、いそいで、廊下のくらくところへ、かくれなければなりません。しかし、ぼくは、じゆうぶん、にげ道をしらべておきましたから、まず、だいじょうぶだと思いません。」

明智探偵といつしよに、外に出ると、小林君は、鉄ごうしのドアをしめて、かぎをかけました。そして、うすぐらい廊下の、壁をつたうようにして、秘密の地下室から、ふつうの地下室へ、それから一階へと、足音をしのばせて、いそぐのでした。

さいわい、だれにも見つからず、洋館の外に出ることができました。それから、さびしいやしき町を、はしるようにして大通りに出ると、タクシーをひろって、こういうときに、いつもつかう、渋谷駅ちかくの目だたない旅館へといそぎました。

旅館の一部屋へおちつくと、小林君は、これまでの、いつきいのことを、明智先生に話しました。

「いま午後四時半ですね。じつは今夜、おそろしいことがおこるのです。まだじゆうぶんにあいます。それをふせがなければなりません。一寸法師の魔法医者は、先生とそっくりの人間をつくりました。そいつが明智探偵としてはたらくのです。

ぼくはニコラ博士のみかたの、にせ小林だとおもわれていたので、かれらの秘密のたくらみは、みんなきいてしまいました。ですから、今夜のことも知っているのです。」

そして、小林君は、そのおそろしいたくらみというのを、くわしく話してきかせるのでした。

青い炎

小林少年が、ニコラ博士のとりことなった明智探偵をたすけだして、ニコラ博士のおそろしいたくらみを話してきかせた、あの日の夕方のことです。

お話かわって、せたがや世田谷区のやしき町に、広い邸宅をもっている、そのだいでう園田大造というお金

持ちから、明智探偵事務所へ電話がかかってきました。

「明智先生ですか、ひじょうに重大な事件で、ご相談したいのですが、すぐ、わたしのうちまでおいでねがえませんかでしょうか。」

園田さん自身が電話口に出て、声をふるわせてたのんでいるのです。

「重大な事件というのは、いったい、どんなふうな事件でしょうか。」

明智がたずねますと、

「いや、電話では話せません。ぜひ、お目にかかってお話ししたいのです。おそろしい事件です。先生のお力をかりなくては、どうにもならないのです。先生のことは、友人の菅^{すがわ}原君^らの宝石事件で、よくぞんじております。どうか、わたしを助けてください。」

そうまでいわれては、たのみをきかないわけにはいきません。明智探偵は、すぐおうかがいするといつて、電話をきりました。

それから一時間ほどして、園田さんの大きなやしきの洋風応接間に、主人の園田さんと、明智探偵と、助手の小林少年がテーブルをはさんで話しあっていました。

「すると、あいては、ニコラ博士ですね。」

明智が、しんけんな顔で、ききかえしました。

「そうです。わたしは毎朝、五時におきて、庭を散歩するのですが、けき、庭を歩いていますと、木の間にあいつが立っていたのです。長いひげをはやした、七十歳ぐらいのじいさんです。そいつのからだは、青く光っていました。まだうすぐらい木のしげみの中ですから、幽霊のように、青く光っているのが、よくわかるのです。わたしは、びっくりして、にげだそうとしましたが、催眠術でもかけられたように、足が動かなくなって、にげることができません。」

そいつは、じつと、わたしの顔を見つめながら、地の底からびびくような、気味のわるい声で、こんなことをいいました。

『わしは、おまえのだいじにしているダイヤモンド『青い炎』がほしいのだ。こん夜、かならずもらいにくるから、用心するがいい。だが、おまえがどんなに用心しても、わしは魔法つかいだから、かならず、とつてみせるよ。』

そういつて、ウフフと笑ったかとおもうと、そののヒノキのみきにつかまって、まるでサルのように、スルスルとのぼっていき、木の葉の間に、姿が見えなくなってしまいました。先生、それから、おそろしいことがおこったのです。」

園田さんは、そこでちよつとことばをきつて、おびえたような目で、窓の外の空をなが

めました。

「ヒノキのてっぺんから、あいつが、空へとびたつたのです。そして、朝やけの空を、アメリカのスーパーマンのように、両手を前につきだして、マントをヒラヒラさせて、ひじょうな速さで空中をとびさつてしまったのです。」

園田さんは、まっさおな顔になっていました。

「ニコラ博士が空をとぶことは、ぼくもきいております。それについて、ぼくはある考えをもっているのですが……。ところで、そのあなたのダイヤモンドというのは、どこにおいてあるのですか。」

明智がたずねますと、園田さんは、なぜかニヤリと笑って、

「それはだれも知りません。わたしのほかには、だれも知らないのです。しかし、あいつはスーパーマンみたいなやつですから、宝石のかくし場所を知っているかもしれない。」

このダイヤモンドには『青い炎』という名がついているのです。インドの仏像のひたいに、はめこんであつたのを、あるイギリス人が手にいれて、それがまわりまわって、わたしのものになったのです。青い炎がもえるように、かがやいているので、そういう名がついたのです。二十五カラットもある大きなもので、日本では最大、最高のダイヤです。

ですから、わたしは、これを、ぜったいにわからないある場所にかくし、うちのものにも見せないようにしているのです。まして、他人には一度も見せたことがありません。

じつは、二―三日前に、ある有名な宝石商が、日本じゆうの宝石をあつめて、宝石展覧会をひらきたいから『青い炎』を出品してくれないかといってきたのですが、わたしは、ぜったいに人に見せるつもりはないといつて、かたくことわったほどです。」

「そうですか。それほどどの宝物でしたら、ほくも、全力をつくして、おまもりしますが、そのダイヤモンドは、いつたい、どこにかくしてあるのでしょうか。それをうかがっておかないと、まもるにもまもれないのですが。」

明智のことばに、園田さんはうなずいて、

「ごもつともです。先生にだけは、かくし場所を、おおしえするほかありません。いま、そこへごあんないしますから、どうかこちらへおいでください。」

といつて、いすから立ちあがり、園田さんは、女中さんをよんで、明智探偵と小林少年のくつを、庭のほうへ、まわすようにいつけておいて、廊下を、さきに立つてあるいききました。

廊下を二つほどまがると、庭へおりるドアがひらいていて、三人はそこからおりていき

ました。

池や林のある、広い庭です。林の中を通りすぎると、ちよつとした広っぱがあり、そこにお寺のお堂のようなものが立っていました。

「わたしの持仏堂じぶつどうですよ。この中に、平安朝へいあんちよう時代の黄金仏が安置してあるのです。」

園田さんはそういって、お堂のとびらをひらき、ふたりを中にあんないしました。

うすぐらいお堂の中には、まんなかに大きな台があつて、その上に、人間の倍もあるような、金色の仏像が立っていました。その台のまわりはグルツと石だたみでかこまれ、仏像を横からでも、うしろからでも見られるようになっていのです。

「うまいかくし場所でしょう。この仏像は国宝です。だれも国宝に傷をつけるなんて、考えもしないでしょう。ところが、わたしは傷をつけたのです。この仏像の背中に、十センチ四方ほどの、小さなきりくわせをつくつて、それを宝石箱にしたのです。外から見たのでは、ちつともわかりません。こちらへきてごらんなさい。」

園田さんは仏像のうしろへまわりました。明智探偵と小林少年も、そのあとについていきましたが、仏像の背中のごくに、秘密のかくし場所があるのか、すこしもわかりません。「このボタンをおせばいいのです。」

園田さんは、仏像の右のものもある、ちよつと見たのでは、わからないほどの、イボのようなものを、グツとおしました。すると、カタンと音がして、仏像の背中の四角いふたがひらいて十センチ四方ほどの穴があきました。

「この中に宝石がはいっているのです。だが、まってください。むやみに手をいれてはあぶない。どろぼうの用心がしてあるのです。宝石をとろうとして、手をいれると、穴の四方から、するどい鉄のツメが、サツととびだして、手にささり、どろぼうは動けなくなってしまうのです。」

それをふせぐのには、もうひとつのかくしボタンをおせばよろしい。」

園田さんは、こんどは仏像の左のもの、やはり小さなイボのようなものをおしました。「さあ、これで、もうだいじょうぶ。」

といいながら、穴の中へ手をいれて、ダイヤモンド「青い炎」をとりだし、明智探偵に見せるのでした。

ああ、なんとというみごとな宝石でしょう。虹にじのように七色にかがやいているのですが、青の色がいちばんつよく、ほんとうに、青い炎がもえているようです。

「ぼくも、いろいろな宝石を見ましたが、こんなにつばなのは、はじめてです。なるほど

日本一のダイヤモンドですね。」

明智探偵も、思わず、ほめたたえないではいられませんでした。

「だから、ニコラ博士が目をつけたのですよ。だいじょうぶでしょうか。あいてはおそろしい魔法つかいですからね。」

園田さんは、心配そうです。

「ぼくがおひきうけしたら、だいじょうぶです。ぼくは魔法つかいというやつには、たびたび出あつたことがあります。一度も、やぶれたことはありません。あいてが魔法をつかえば、こちらも、それ以上の魔法をつかうからです。」

明智探偵の力づよい返事に、園田さんは、安心したようすで、宝石を穴の中にもどし、ボタンをおして、そのふたをしめました。

「ぼくは、いまから、夜にかけて、ずっと見はりをつづけましょう。しかし、このお堂の中にいたのでは、ダイヤはここにかくしてありますと、敵に知らせるようなものですから、ぼくと小林はお堂のそばの庭にかくれて、見はりをつづけます。もしニコラ博士がやってきたら、かならず、つかまえてお目にかけます。ここはぼくたちにまかせて、あなたは、うちにおもどりになっているほうがよろしいでしょう。」

園田さんが、うちの中へもどるのをまって、小林少年は、明智探偵になにかさきやいたうえ、電話をかけるために、おもやへはいつていきましたが、それは、少年探偵団のおもな団員を、よびあつめるためでした。それから一時間もしますと、十人の団員が、園田さんの庭へ、つぎつぎと、あつまってきた、あちらこちらの木かげに身をかくして、ニコラ博士のやってくるのをまちうけました。この少年たちは、このあいだ芝公園で、ニコラ博士にひどいめにあっているので、きようは、そのしかえしをしてやろうと、はりきっているのです。

ふたりの明智小五郎

そして、日がくれ、だんだん夜がふけていきました。

夜の十時に、園田さんに電話がかかってきました。

「わしがだれだか、いわなくても、わかっているじやろう。うん、そのとおり、わしはニコラ博士じや。きみのダイヤモンドは、明智小五郎が見はりをしているね。いい人をたのんだものじや。なにしろ日本一の名探偵じやからなあ。

だが、だいじょうぶかね。わしは魔法つかいじやよ。もうとづくにダイヤモンドを、ぬすんでしまったかもしれないぜ。え、どうだね、心配ではないかね。ウフフフフ、ほうら、見たまえ、きみは声がふるえている。心配になってきた。

ダイヤモンドは、かくし場所にあるだろうか。いや、ないのだ。あのかくし場所は、からっぽだ。うそだと思うなら、いますぐ、あそこへいって、しらべてみるがいい。ウフフフ……。」

そして、ガチャンと電話がきました。

園田さんは、受話器をおいたまま、まつさおになって、その場に立ちすくんでいました。庭の持仏堂へいってみないでは、どうにも安心ができません。

懐中電灯をもって、えんがわから庭げたをはいて、あの黄金仏のお堂の前につけました。

「明智先生、明智先生はいませんか。」

大きな声でよびますと、お堂のそばのしげみの中から明智探偵と小林少年が出てきました。ちょうど月夜で、そのへんは昼のように明るいです。

「どうなすったのです。なにかあったのですか。こちらは、べつにかわったこともありま

せんが。」

明智ののんきなことばに、園田さんははらだたしげに、どなりつけました。

「ニコラ博士が電話をかけてきたのです。そして、ダイヤは、とつくにぬすんでしまったというのです。明智さん、しらべてください。ダイヤがかくし場所にあるかないか、しらべてみてください。」

「そんなばかなことがあるものですか。ぼくはお堂の入口をずっと見はっていました。お堂のとびらは、一度もひらかなかったのです。だから、ダイヤをぬすみだせるはずがありません。」

「ともかく、しらべてみましょう。いつしよにきてください。」

園田さんは、いいすてて、お堂のとびらをひらくと、その中へとびこんでいきます。しかたがないので、明智探偵と小林少年も、そのあとからついていきました。

園田さんは仏像のうしろへまわると、かくしボタンをおして、秘密のふたをひらき、もうひとつのボタンをおして、鉄のツメがとびださないようにしておいて、穴の中へ手をいれました。

「あつ、ない。なくなっている。明智さん、この中はからっぽですよ。」

明智探偵をしかりつけるように、さげびました。

「おかしいですね。ニコラ博士は、このかくし場所を、知らないはずじゃありませんか。それをどうして……。」

「だから、はじめから、もうしあげておきました。あいつは魔法つかいです。どんなことだってできるのです。それをふせいてくださいるのが、あなたの役目ではありませんか。しかも、あんなにかたく、おひきうけになったではありませんか。」

園田さんに、つめよられて、明智探偵はタジタジとあとじさりをしていました。

そのときです。じつにふしぎなことがおこりました。とびらをひらいたままになってい
るお堂の入口に、みょうな人間が立っていたのです。

銀色の月の光が、横のほうから、その人の顔の半分を、てらしていました。

園田さんも、明智探偵も、その顔を見ると、あつとさげんだまま、立ちすくんでしま
いました。

その人は懐中電灯を持っていました。その光をこちらにむけながら、ゆっくりとお堂の
中へはいつてきます。

こちらの三人は、思わずあとじさりをしながら、園田さんの懐中電灯は、しぜん、そ

のふしぎな人間の顔をてらしました。

あいての懐中電灯は、明智探偵の顔をてらしています。

人間の倍もある金色の仏像の前に、おたがいに懐中電灯でてらされた二つの顔が、まっ正面にむきあっていました。

おお、ごらんなさい。その二つの顔は、まるで鏡にうつしたように、そっくりおなじではありませんか。

そうです。明智探偵がふたりになったのです。どちらかが、ほんもので、どちらかが、にせものにちがいありませんが、その見わけが、まったくつかないのです。

「ワハハハハ……、にせものの明智君、うまくばけたね。しかし、きみはニコラ博士の手下だ。ダイヤモンドをまもるのではなくて、それをぬすむためにやってきたのだ。そして、きみはもうぬすんでしまったのだ。」

あとからきたほうの明智が、そういって、カラカラと笑いました。

しかし、前からいる明智も、けっしてまけてはいません。

「なにをばかな。きみこそにせものだ。いまごろになって、ノコノコやってきたのが、にせもののしょうごじやないか。」

だが、うたがうなら、ぼくのからだをさがしてみるがいい。あんな大きなダイヤだから、ぼくが持つていけば、すぐにわかるはずだ。」

それをきくと、小林少年が、お堂の入口へかけて行って、用意していた、呼び子の笛をとりだすと、ピリピリピリリリリリ……と、はげしくふきならしました。

この小林少年は、ほんものなのでしょうか、それとも、にせものなのでしょうか。読者諸君は、もうおわかりになっているでしょうかね。

それはともかく、呼び子の音に、庭のあちこちにかくれていた十人の少年探偵団員が、大いそぎでかけつけてきました。

少年たちはお堂の入口にむらがつて、中をのぞきこみましたが、明智先生がふたりいるのを見ると、ギョツとして、ものもいえなくなつてしまいました。

「やあ、少年探偵団の諸君だね。ここにいるぼくとそっくりのやつは、にせものだ。こいつは大きなダイヤモンドをぬすんだのだ。きみたちみんなで、こいつのからだをしらべてくれたまえ。どこかにかくしているにちがいないのだから。」

あとからきた明智がいますと、さきにかけていた明智もまけないで、少年たちに声をかけました。

「やあ、きみたち、ゆだんをしてはいけないぞ。いましゃべったやつが、にせもので、ニコラ博士の手下だよ。」

しかし、ぼくのからだをさがすなら、さがしてもよろしい。ぼくはぬすみなんか、ぜつたいにしていないのだから。」

すると、小林少年が、さきにたつて、その明智のポケットなどを、さがしはじめましたので、少年たちも、四方から明智のからだにとりついて、上着とズボンをさがしたあとで、その上着とズボンを、よつてたかつて、ぬがせたうえ、シャツとズボン下だけになった明智を、とうとうその場にころがしてしまいました。

いくら子どもでも、小林君をまげて十一人ですから、どんな力のつよいおとなだって、どうすることもできません。十一人にとりつかれては、まるでアリにたかられたコオロギのようなもので、されるままになっているほかはないのです。

「ないねえ。」

「ないよ。」

「先生、どこにもダイヤなんて、かくしていません。」

あらゆる場所をさがしたあげく、少年たちは、とうとう、かくしていないときめてしま

いました。

「そうらみろ。ぼくがぬすみなんかするはずはない。なぜとって、ぼくこそほんとうの明智小五郎だからだ。そこにいるやつが、にせものだよ。」

シャツ一枚にされた明智が、それみろといわぬばかりに、とくいらしくいきました。

それをきくと、小林君が、ハツとなにかを、思いだしたようすで、大声にどなりました。「そうじゃない。まださがさないところが、一カ所だけある。きみたち、そいつの顔を、動かないように、つよくおさえていてくれたまえ。ぼくは、そいつの左の目をえぐってやるのだ。」

小林君が、おそろしいことをいいました。

しかし、少年たちは、小林団長の命令にしたがつて、みんなで、たおれた明智の上ののしかかり、頭を地面におさえつけて、顔を動かさないようにしました。

「懐中電灯で顔をてらしてください。」

小林君はそういいながら、人さしゆびをグツとのばして、いきなり、明智の左の目にちかづけました。

ああ、なんとというざんこく！ 小林君の指は、あいての左の目の中へ、グーツと、つき

ささっていきました。そして、目の玉をくりぬいてしまったではありませんか。

「みなさん、こいつの左の目は義眼なのです。義眼がもののかくし場所になっているのです。ごらんさい、これが園田さんのダイヤです。」

小林君はそういつて、大きな宝石を、高くかざして見せました。懐中電灯の光をうけて、それは青い炎のようにもえています。

怪獣のさいび」

「やつ、さては、きさま、ほんとうの小林だな。いつのまに、いれかわったのだ。」

にせ明智は、おさえつけられたまま、わめきました。

「ハハハハハ、はじめから、いれかわっていたのさ。にせの小林は、ぼくのかわりに、地下室の牢屋にはいつているよ。ぼくが、ほんとうの明智先生をとらえる手だすけをしたのは、きみたちを、ゆだんさせるためだったのさ。」

小林君は、笑いながら、種あかしをしました。

「ちくしょうめ、こわっぱめに、はかられたのかつ。」

にせ明智は、さもくやしそうに、つぶやきましたが、そのあとから、かれの顔に、うすきみのわるい笑いがかんできました。

「ウフフフ、きみたち、それで、勝ったつもりでいるのかね。ウフフフ、そうはいくまいぜ。こつちには、おくの手があるんだからね。

おい、おれのはらを、おさえているぼうや、右のポケットにさわってごらん。写真機みたいなものが、はいつているだろう。

それを、なんだと思うね。世界でいちばん小さい無電機だよ。さつきからスイッチはいられたままになっているから、ここで、みんなのしゃべったことは、すっかりニコラ博士の無電機にはいつている。

さあ、そうすると、どういうことになるだろうね。いまに、おそろしいことがおこるだろうから、用心するがいいぜ。」

ただのおどかしではなさそうです。小林君は、にせ明智のポケットから、写真機のようなものを、とりだしました。たしかに小型無電機のようにです。スイッチをはずして、音がつたわらないようにして、じぶんのポケットにいれました。

「きみたち、そいつの手と足を、グルグルまきにしばって、身動きできないようにするん

だ。みんな、ほそびきを、腰にまいているだろう。それでしぼるんだ。」

小林君の命令で、十人の少年のうちの三人が、腰のほそびきをとりて、にせ明智を、げんじゆうに、しぼりあげてしまいました。

そのとき、持仏堂の入口から、ほんものの明智探偵が、はいつてきました。いつのまにか、外へ出て、どこかへ行ってきたらしいのです。

「いや、感心、感心、さすがに小林君だ。よくやった。」

明智探偵はニコニコしながら、小林少年をほめたたえるのでした。

「ウフフフ……。」

しぼられて、お堂の入口にころがっている、にせの明智が、また、うすきみわるく笑いしました。

「ニコラ博士は、あんがい、近くにいるのだ。もうやってくるじぶんだぜ。どんな姿で、やってくるか、きもをつぶさぬ用心をするがいい、ウフフフ……。」

そのときです。お堂の外から「ウォーツ。」という、ものすごい声、ひびいてきました。明智探偵と小林少年は、お堂の外に、とびだしてみました。

月がてりかがやいて、そのへんは、昼のように明るいです。それに、広い庭には、森

のように木のしげったところがあります。

その中は、月がさしこまないで、まっくらです。

そのときです。チカツと金色に光るものが見えました。

そしてまた、「ウオーツ。」という、おそろしい、うなり声です。

「先生、さつき、お話した金色のトラです……。今夜は、きつと、あらわれるだろうと、思っていました。」

小林君が、そういつているうちに、黄金のトラは全身をあらわして、こちらへノソノソ歩いてきます。

人間が四つんばいになったほどの、でっかいトラです。そして、そのからだは、金色にピカピカ光っているのです。

「ウオーツ。」

こちらをむいて、大きな口をガツとひらきました。白いするどい牙きはがニユツとつきだし、口の中はもえるように、まっかです。二つのまんまるな目はリンのように青く光っています。

さすがの明智探偵も、小林少年も、それを見ると、思わず、たちすくんでしまいました。

すると、黄金のトラは、ゆうゆうと、森の外に出てきました。月の光をあびて、全身が美しく光りかがやいています。

小林君のうしろにいた十人の少年たちは、「ワーツ。」といって、にげだしました。トラは少年たちには目もくれず、パツとひととびで、お堂の入口にちかづきました。その速さ！ まるで金色のじが立ったように見えました。

トラはお堂の中にはいると、そこところがされている、にせ明智のそばによって口とまえ足をつかつて、ほそびきを、ほどこうとしました。

それを見ると、明智探偵が、小林君の耳に、なにかささやきました。

小林君は、うなずいて、ポケットからピストルをとりだしました。にせ小林になりすまして、自動車の中で、明智にさしむけた、あのピストルが、まだポケットにはいつていたのです。

「ごらっ、やめろっ。でないと、ピストルをぶっぱなすぞ。」

小林君は、まるで、あいてが人間でもあるように、どなりつけました。

すると、ふしぎなことが、おこったのです。トラが、人間のようになり、まえ足を上にあげて、「かんべんしてください。」といわぬばかりに、あとじさりをはじめたではありません。

んか。

「あつ、そいつもにせものだ。ほんとうのトラでなくて、人間がトラの皮をかぶっているのだ。みんな、こいつをやっつけてしまえ。皮をはいでしまえつ。」

小林君がさげびますと、にげだしていた少年たちが、もどつてきました。

「それつ、やっつけるんだ。」

小林君が、まっさきに、トラにとびついていきました。十人の少年たちも、四方からトラのからだに、くみつき、「エイ、エイ。」とかけ声をして、とうとう、トラをそこにおしてしまいました。

「あつ、やっぱりそうだつ。ここにチャックがある。」

小林君が、それをグーツとひっぱりますと、トラのはらがさけて、中に人間がはいっていることがわかりました。黒いシャツをきた大きな男です。

「みんな、こいつもしばつてしまえ。」

十人の少年たちは、すっかりトラの皮をはいで、黒シャツの男を、グルグルまきに、しばつてしまいました。

トラ男は、小林君のさしむけるピストルを見て、うっかり手をあげたのが、しっばいで

した。それで人間だということがわかってしまったのです。

そのときです。またしても、むこうの木のしげみの中から、「ウォーツ、ウォーツ。」という、おそろしいうなり声が、ひびいてきました。そして、チラツ、チラツと金色のものが、見えたりかくれたりしています。

トラは一びきではなかったのです。

木の間から、二ひきの大トラが、ノソノソとあらわれてきました。

こんどは、ほんもののトラかもしれませぬ。ピストルをさしむけても、いつこうに、ひるむようすがないのです。

「先生、足を撃ちますよつ。」

小林君は、明智探偵に、そうさけんでおいて、ピストルを撃ちました。致命傷をあたえないように、足をねらったのです。

みごとに命中しました。明智探偵事務所では、ピストルなんか、めつたに使いませんが、明智探偵はピストルの名手ですし、小林君も、まんいちの場合のために、ひごろ射撃の練習をしていますので、それが、こういうときに、役に立つのです。

あと足をうたれたトラは、そこにころがって、まえ足で傷口をおさえています。ほんと

うのトラならば、口で傷口をなめるはずではありませんか。

「あつ、やっぱり人間だつ。そいつもしばつてしまえ。」

小林君の命令に、少年たちはゆうかんに、二ひきのトラに、とびかかっていきました。傷つかないほうのトラも、一ぴきが撃たれたので、にげだそうか、どうしようかと、まよつていましたが、少年たちが、とびかかってきたので、もうにげることはできません。死にもぐるいの戦いがはじまりました。

傷ついたトラも、こうなつては、じつとしてゐるわけにいきません。いたさをこらえて、おきあがり、少年たちにむかつてきました。

こんどは、あいてが二ひきですから、少年たちは、二組にわかればならないので、なかなかの苦戦です。

二ひきの黄金の怪獣が、あちらにとび、こちらにとび、少年たちをけちらして、あばれまわり、月光にてらされた黄金のじが、じゅうおう縦横にிரりみだれました。

しかし、こちらは小林少年をいれて十一人の少年探偵団員です。それに、明智探偵と園田さんも、てつだつてくれるのです。いくら強くても、ほんとうのトラではないのですから、とてもかなうものではありません。二十分ほどもかかった大格闘のすえ、トラは二ひ

きとも、その場に、くみせられてしまいました。

まだあとから、べつのトラが出てくるのではないかと、しばらくまっただけでしたが、そのようすもありません、トラはぜんぶで三びきしかいなかったのです。

そのときです。少年のひとりが、大きな声でさげびました。

「あつ、スーパーマンだつ！」

ニコラ博士の秘密

ああ、ごらんなさい。はれわたった月光の空を、黒いマントをひるがえした、スーパーマンが、とんでくるのです。

これこそニコラ博士にちがいありません。博士のほかに、空をとべるやつがあろうとは思えないからです。

両手をグツと前につきだして、風をきつてとぶスーパーマンは、お堂の上までくると、その屋根のまわりを、グルグルと、まわりはじめました。地上五十メートルほどの高さです。ニコラ博士は、そこから、下界のようすを、見とどけようとしているのです。

敵は、高い空中にいるのですから、どうすることもできません。ピストルを撃とうにも、あまり高いので、もしあいてを、ころしてしまうようなことがあっては、たいへんですから、それもできないのです。

ニコラ博士は、こちらをばかにしたように、いつまでも、お堂の上を、グルグル、グルグル、まわっていましたが、やがて、むこうの森のような木立ちの上へとんで行って、姿が見えなくなっていました。

「森の中におりたのかもしれないぞ。」

少年のひとりが、大きな声でいいました。

いまに、こちらに出てくるだろうと、みんな、ゆだんなく、まちうけました。小林君はピストルをかまえることをわすれませんでした。

しかし、いくらまわっても、ニコラ博士は出てくるようすがありません。どこかへ、とびさってしまったのでしょうか。それとも、森の中におりて、なにかたくらんでいるのではないのでしょうか。

みんなはもう、まちきれなくなりました。

「森の中にはいって、ようすを見ることにしよう。」

小林君は、とうとう、しびれをきらして、森の中にはいつてみる決心をしました。明智探偵もいつしよにいつてくれることになりました。

少年探偵団員たちは、みんな小型の懐中電灯をもっていますので、てんでに、それをふりてらしながら、まっくらな森の中にはいつていくのです。小林団長はピストルをにぎつて、先に立つています。

ひとかかえも、ふたかかえもあるような、大きなヒノキなどが、たちならんでいます。懐中電灯はたくさんあつても、みんな万年筆型の小さいのですから、たいして明るくはありません。いやにチロチロして、なんだか、そのへんに、あやしいやつがかくれているような気がします。

木のみきから、木のみきを、グルグルまわつて、すすんでいきましたが、森のまんなかへんにきたとき、とつぜん、ガサガサという音がしたかと思うと、先に立っていた小林君の頭の上から、なにか大きなものが、サーツとおちてきました。

アツというまに、小林君は、そこにたおれていました。

「だれだつ。きさま、ニコラ博士だなつ。」

小林君は、大声にさげびましたが、ふと気がつくつと、右手ににぎっていたピストルが、

ありません。

「ワハハハハハ、いかにも、おれはニコラ博士だ。小林君、きみのピストルは、いまもらったよ。こっちは、おれのピストルだ。つまり二挺拳銃ちようさ。きみたちは、だれももうピストルはもっていない。こうなったら、おれの命令にしたがうほかはないね。さあ、そこをのくんだ。ニコラさまのお通りだ。」

少年たちは、みんな、あとじさりをして、道をあげました。コウモリのようなマントをきた、白ひげのニコラ博士は、ゆうゆうとその間をとおって、森の外に出ていきました。だれもてむかうものはありません。少年たちがおそれをなしたのは、むりがないとしても、名探偵明智小五郎は、いったい、どうしたのでしょうか。ふしぎなことに、そのへんに、姿が見えません。まさかにげだしてしまったわけではないでしょう。いや、にげだすどころか、そのとき、明智探偵は、ニコラ博士に気づかれぬよう、ある場所で、ひじょうにだいいじな仕事をしていたのです。

森を出たニコラ博士は、お堂の前に立っていた園田さんのそばへ、両手にピストルをかまえながら、近づいていきました。

「おい、さつき小林からうけとった、ダイヤモンドを、おれにわたせ。おれはニコラ博士

だ。いうことをきかなければ、きみの命がないぞ。」

地の底からひびいてくるような、いやな声です。二挺のピストルをつきつけられては、命令にしたがうほかはありません。園田さんは、ポケットから「青い炎」をとりだして、博士の前に、さしだしました。博士はそれをうけとって、

「よし、よし、これでおれも、約束をはたしたわけだね。ワハハハハハ、じゃあ、あばよ。」

といいすてて、また森の中へはいっていきました。

少年たちは、まだ森の中にいましたが、だれもこの怪人にてむかうものはありません。

やがて、さつき小林君の上から、とびおりた、大きなヒノキのそばへくると、二挺のピストルを、両方のポケットにいれ、いきなり、そのみにすがりついて、木のぼりをはじめました。まるでサルのように、木のぼりがうまいのです。たちまち、枝や葉のしげった中に、姿が見えなくなつてしまいました。

小林少年は、べつの木のみきにかくれて、そつとそのようすを見ていました。懐中電灯はつけなくても、やみに目がなれて、ぼんやりと、そのへんが見えるのです。

小林君は、いまに木の上で、どんなことがおこるかを、あらかたさっしてしまいましたので、

それをたのしみにして、まちかまえているのです。

ここで、お話は、そのヒノキの上の枝葉えだはのしげった中にうつります。

ニコラ博士は、二挺のピストルをポケットにいれ、両手で木のみきをかかえながら、第一の横枝から、第二の横枝へと、だんだん上のほうへ、のぼっていきました。

そして、第三の横枝にのぼりついたときです。ハッと気がつく、両方のポケットが、かるくなっていました。

びっくりして、足でからだをささえ、両手でポケットをさぐってみますと、ピストルがありません。二挺ともなくなっているのです。

ふしぎです。おとしたはずはありません。ひよつとしたら、この木にはサルかなんかがいて、ピストルを、よこどりしたのではないでしょうか。

「ウフフフ、ニコラ博士、びっくりしているね。ぼくだよ、明智小五郎だよ。ピストルは、ぼくがちようだいして、下へなげおとしてしまったのだよ。これで、きみもぼくも、武器がなくなったのだから、ごかくの戦いができるというものだ。」

ああ、名探偵はここにかくれて、ニコラ博士のかえってくるのを、まっていたのです。博士はスーパーマンのように、空をとぶためには、どうしても、この木のとっぺんに、か

えってこなければならぬわけがあったのです。明智探偵は、そのことを、ちゃんと知っていました。

明智は、さらに、ことばをつづけます。

「ぼくがどうしてこんなところにいるか、そのわけは、きみももう、さっししているだろうね。

いうまでもなく、きみの空とぶ羽根を、こわしてしまつたためさ。きみがどうして、スーパーマンのように、空をとぶか、その秘密を、ぼくは知っているのだ。数年前、あるフランス人が、人間が背中につけてとべる、ヘリコプターを小さくしたような機械を発明した。日本にたつたひとり、その機械を買い入れたやつがいる。きみはそれを使ってスーパーマンのまねをしていたのだ。夜や、うすぐらい日には、プロペラが見えないので、いかにもスーパーマンがとんでいるように思うのだ。

きみは、その機械を、この木のでつぺんにかくしておいて、ダイヤモンドをうばうために、おりにいったが、それが手にはいったので、またプロペラを背中につけて、空へとびたつために、ここにもどつてきた。だが、もうだめだよ。あの機械は、きみが下においているうちに、ぼくがこわしてしまつた。きみはもうとべないのだ。スーパーマンが飛行の

術をうしなってしまうのだ。」

そのとき、パツと、二つのまるい光がいれちがって、まっくらな木の葉の中に、二つの人間の顔が、明るくてらしだされました。

明智探偵と、ニコラ博士とが、それぞれ懐中電灯をとりだして、あいての顔をてらしたのです。

怪人二十面相

名探偵とニコラ博士は、ヒノキの枝の上で、にらみあいました。

「きみは、この木のでっぺんから、スーパーマンのように、とびたつつもりだったろうが、そのとび道具のプロペラは、ぼくがこわしてしまった。きみはもう超人の力をうしなつたのだ。」

明智が一段上の木の枝から、ニコラ博士を見おろして、とどめをさすように、いいました。

ニコラ博士は、ポケットにいていた二挺のピストルも、さつき明智にとりあげられて

しまったので、もうどうすることもできません。上の枝には明智がいるのですから、にげるなら、下におりるほかはないのです。

博士は、いきなり、木をすべりおちるように、下へにげます。明智はそのあとをおいながら、大声にさげびました。

「おい、小林君、少年探偵団の諸君。ニコラ博士は、木をおりていく。ピストルはぼくがとりあげてしまったから、だいじょうぶだ。みんなで、つかまえてくれたまえ。」
すると、下にまちかまえていた小林少年が、ポケットから、呼び子の笛をとりだして、ピリピリピリ……と、ふきならしました。

それをきくと、四方ににげちつていた少年たちが、小林君のそばに、かけもどつてきました。

「ニコラ博士は、もうピストルを持っていない。みんなで、つかまえるんだっ。」
そうさげんでいるところに、すぐ目の前のヒノキのみきを、サーツとすべりおりてくるニコラ博士の姿が見えました。

「それっ。」というので、少年たちはとびかかっけていきます。

おそろしい格闘がはじまりました。ニコラ博士は、若者のような力があります。くみつ

いていく少年たちは、かたつぱしから、投げとばされました。

しかし、投げられても、投げられても、まったくみついていく少年たち。こちらは小林少年をいれて十一人です。いくら博士が強くても、だんだん、旗色はたいろがわるくなってきました。

しかし、ニコラ博士にはおくの手があつたのです。

博士は、少年たちのうちで、いちばんよわそうなひとり、いきなり、うしろから、だきかかえると、少年の首に、腕をまきつけて、のどをしめました。

「やい、こわっぱども。おれにてむかいすると、この子どもを、しめ殺してしまうぞつ。さあ、どうだ。これでもか。」

小林君の懐中電灯が、そのありさまをてらしました。

つかまつている少年は、息がつまって、まっかな顔をして、目を白黒させています。このまま、ほうっておいたら殺されてしまうかもしれません。

小林君はポケットをさぐりました。そこには二挺のピストルがはいっています。さつき、木の上から、明智探偵が投げおとしたニコラ博士のピストルを、ひろっておいたのです。

「ニコラ博士、その手をはなせつ。でない、これだぞつ。」

小林君は、右手で一挺のピストルをかまえて、左手の懐中電灯の光を、それにあててみせました。

そのとき、くらやみの中から、明智探偵の力強い声がひびいてきました。探偵もヒノキからおりて、さつきから、格闘のようすをながめていたのです。

「二十面相君、きみは人殺しはしないはずだったね。」

ふいをつかれて、ニコラ博士は、おもわず、少年をつかまえていた手をはなしました。そして、おどろきのために、とびだすほど、見ひらいた目で、やみの中をみつめました。ニコラ博士の顔は、明智の懐中電灯でてらされていましたが、明智の姿は、やみにかくれて、すこしも見えないのです。

「ハハハハ……、とうとう白状したな。いまのようすで、きみが二十面相であることは、もうまちがいない。背中につけて、空をとぶ豆ヘリコプターを持っているのは、二十面相のほかにはない。ぼくはそれを、まえに見たことがあるので、よく知っているのだ。このヒノキのてっぺんに、かくしてあったのは、それとおなじものだった。」

ぼくはさいしょから、ニコラ博士は二十面相にちがいないと思っていた。宝石や美術品ばかりねらうのは、いかにも二十面相らしいし、小林君や少年探偵団員を、ひどいめにあ

わせて、よろこんでいるのは、二十面相の復讐としか考えられないからね。そこへもってきて、小林君が、にせ小林になりすまして、きみの秘密を、みんなきいてしまったのだよ。ハハハハ……、二十面相君、しばらくだったねえ。」

「ワハハハハ……。」

ニコラ博士は、明智よりも、もっと大きな声で笑いとばしました。

「明智君、きみももうろくしたな。てごわいあいてにでくわすと、みんな二十面相にしてしまう。わしはドイツ生まれの百十四歳のニコラ博士だ。人ちがいをしてもらってはこまるよ。」

そのとき、やみの中から、パツととびだしてきたものがあります。明智探偵です。探偵は、いきなり、ニコラ博士にちかづくど、博士の長い白ひげと、しらがのかつらを、力まかせに、はぎとってしまいました。その下からあらわれたのは、黒いかみの毛の、わかわかしい顔でした。

こうなつては、もう百十四歳の老人などといはることはできません。

「ハハハハ……、さすがは明智君だ。とうとうニコラ博士の魔法をやぶってしまったねえ。だが、おれはまだまけたわけではないぜ。いつもいうように、おれはどんなときでも、さ

いごのおくの手が、のこしてあるのだ。」

そういったかと思うと、ポケットから小さな写真機のようなものをとりだして、口の前に持っていききました。

「こちらニコラ。こちらニコラ。さいごの手段だつ。わかったか。よしよし、わかったね。」

それは小型の無線電話機でした。はなしかけたあいては、ニコラ博士の、れいのすみかに、るす番をしている部下のものにちがいありません。

二十面相は、にくにくしげな笑い顔で、明智探偵にむきなおりました。

「わかるかね。さいごの手段とは、なんだと思う。爆発だつ。なにもかも、こなみじんになって、ふつとんでしまうのだ。おれの地下室の牢屋には、宝石王玉村一家のものと、白井美術店の人たちが、とじこめてある。おれに自由をあたえなければ、それらの人たちが、みな殺しになってしまうのだ。おれは人殺しは大きらいだ。しかし、おれの自由にはかえられない。おれに人殺しをさせるのも、明智君、みんなきみのせいだぞつ。」

「アハハハハ……。」

とつぜん、べつの方角から、笑い声がひびきました。小林少年です。小林君が、さもお

かしそうに、笑っているのです。

「アハハハハ……、二十面相君、きみは地下室においてある爆薬のたるのことをいつているのだろう。あのたるの導火線に火をつけて、みんながにげだすという、ふるくさいやりかただろう。ところが、あの爆薬は、ぼくがだめにしておいたよ。たるの中は水びたしだし、導火線は外から見たのではわからぬように、きりはなしてあるのだ。それに火をつけたって、爆発などおこりっこないよ。アハハハハハ……。」

それをきくと、二十面相は、無電機を地上に投げつけて、じだんだをふみました。

「ちくしょうめ、小林のやつ、よくもそこまで、手をまわしたなっ。おぼえている。このしかえしは、きつとしてやるからな。」

そのとき、くらやみのかなたから、懐中電灯の強い光が三つ、グングンこちらへちかづいてきました。

「明智君、中村だ。」

それは警視庁の中村警部が、数名の刑事たちをつれてやってきたのでした。

「中村君、ここだ。二十面相はここにいる。つかまえてくれたまえ。」

刑事たちが、二十面相にかけよって、たちまち手錠をはめてしまいました。

さつき持仏堂の中で、小林君がにせ明智の義眼をくりぬいて、ダイヤモンドをとりかえたとき、ほんものの明智探偵が、しばらく、どこかに姿を消していましたが、そのとき、探偵は、中村警部に電話をかけて、いそいでここにきてくれるようにと、たのんだのでした。

「中村君、これからすぐに、こいつのすみかにのりこもう。二十面相もいっしょにつれていく。ぼくは警視庁の留置場にとじこめるまで、こいつのそばをはなれないつもりだ。でない、こいつ、どんなおくの手を用意しているか、わからないからね。」

二十面相の両手に手錠をはめ、右左にひとりずつ刑事がつきそい、手錠の片方を刑事の手にもはめて、ぜったいににげられないようにして、自動車にのりこみました。

二十面相は、もうかんねんしたのか、にが笑いをうかべて、だまりこんでいます。

警視庁の自動車のほかに数台のハイヤーをよんで、中村警部、その部下たち、明智探偵、手錠をはめられたにせ明智、小林少年、それから、今夜のとりものの功労者である十人の少年探偵団員もみんな自動車にのりこんで、怪人のすみかへといそぐのでした。

人間改造術

ニコラ博士のすみかにつくと、中村警部とその部下たちは、うらおもてから建物にふみこみ、そこにいた賊の手下どもを、すっかりとらえてしまいました。

それから、二十面相を、地下室の牢屋の一つにとじこめ、見はりの刑事をつけておいて、べつの牢屋にいれられていた、玉村家と白井家の人たちをたすけだし、牢屋にのこっていた、にせの小林少年は、ひきだして、手錠をはめてしまいました。

「これで、二十面相とその部下のしまつはついたが、まだ一つだけ、のこっていることがある。それは、この地下室のいちばんおくにかくれている、一寸法師の医学者の尋問だ。じんもんまったくおなじ人間を、いくらでもつくりだす、あの医学者の秘密を、あきらかにしなればならない。小林君、そこに案内してくれたまえ。」

みんなは、小林少年のあとについて、部屋ぜんたいのエレベーターで地下二階におり、ロッカーのような人形箱のならんでいる廊下をとおりすぎて、あの、まぶしいほどあかるい機械室にはいつていきました。

すると、たちならぶ、めずらしい機械のおくから、まるでビックリ箱をとびだすように、あの頭をまるぼうずにした一寸法師が、ピヨコンと、姿をあらわしました。

小林少年は、ツカツカとそのそばにちかづいて、

「先生、ぼくをおぼえていらっしやるでしょう？」
と、声をかけました。

「おお、おぼえているとも、わしのかわいいむすこじやもんなあ。」

一寸法師はニヤニヤ笑っています。

「えつ、むすこですつて？」

「おお、むすこじやとも、わしをつくった人間は、千人、万人、十万人、みんなわしのかわいいむすこじやよ。」

ところで、きみたち、おおぜいで、きようは、なにかあるのかね。あつ、そうだ。お祝いのパーティーだったね。シャンパンをぬくんだね。おーい、ボーイども、シャンパンだ。十本、二十本、いや、まだ足りない。五十本、百本、いくらでも持ってこい。そして、けいきよくポンポンぬくん。おーい、ボーイどもはいないのか。ボーイ、ボーイ……。」「

こんなところにボーイなどいるはずがありません。シャンパンなどあるはずがないのです。一寸法師は、このまえ、小林君があつたときから、気がいめいていましたが、今夜はもつとひどいようです。」

「先生、そんなことよりも、このあいだ、ぼくにおしえてくださったように、そっくりおなじ人間をつくり出す方法を、みなさんに話してあげてください。このかたは警視庁捜査課の中村警部さんです。それから、こちらは、ぼくの先生の明智探偵です。今夜はみんなで、あなたのお話をききにきたのですよ。」

「おお、きみが名探偵明智小五郎君か。わしは、一度あいたいと思っていたよ。ちょうどいい。さあ、シャンパンをぬいて乾杯しよう。そして、きみとおどろう。バンド・マスター、うまくたのむぜ。」

そういったかと思うと、おどろいたことには、一寸法師は、いきなり、ひとりでダンスをはじめ、機械のあいだを、あちらこちらと、はねまわるのでした。

それを見て、明智探偵は、みんなに話しかけました。

「この人は、とうとう気がちがったようです。この人には、まえに小林君があつたことがあるのです。そのときから、すこしおかしかつたようですが、それでも、人間改造術について、ながながと、小林君に演説してきかせたそうです。」

ぼくはそれを、小林君からくわしくきいていますから、ここで、ごくかんたんに、その術についてお話しすることにしましょう。人間の顔をかえることは、眼科や耳鼻科で、今

でも、あるていどは、やっているのです。

眼科では、ひとえまぶたを、ふたえまぶたにする手術は、てがるにできます。顔を美しくしたい若い女の人などが、よくその手術をうけています。

耳鼻科では、ゾウゲやそのほかの材料を、鼻の中に入れる手術で、鼻を高くすることができます。これも、おしゃれの男や女が、さかんにやってもらっているのです。

いまはやっているのは、目と鼻の手術ぐらいですが、やろうと思えば、人間のからだは、どこでも、そういう整形手術をほどこすことができるはずです。たとえば肩のはった人を、なで肩にするのには、肩の骨をけずればいいのだし、あごの形をかえるのにも、やはりあごの骨をけずればいいのです。そういう手術は、わけなくできるけれども、だれもそんなものずきなまねをしないだけのことです。それから、歯を総いれ歯にすれば、そのいれ歯のつくりかたで、口やほおの形を、どんなにでもかえることができます。また、やせたほおをふつくらさせるのには、薬品をほおに注射するというやりかたもあります。かみの毛のはえぎわや、まゆの形をかえるのには、脱毛術、植毛術があり、毛の色をかえるのも、ぞうさないことです。

それから、コンタクトレンズを、すこし大きくつくって、義眼のように黒目の絵をかけ

ば、黒目を大きくも小さくもできるし、目の色をかえることだってわけはないのです。

この一寸法師の医学者は、医科大学にいるところに、人間改造術ということを考えつき、だれもやらないその術のために、一生をささげようと決心したのだそうです。

そして、眼科、歯科、耳鼻科、整形外科、皮膚科、美容術と、あらゆる方面にわたって研究をつづけ、ついに人間改造術というものをつくりあげてしまったのです。ところが、ふつうの人間は、顔かたちをかえることなど、考えるものではありません。もしそういうことを考えるものがあるとすれば、それは犯罪者です。警察に追われている犯罪者ならば、じぶんの顔を、まったくちがった顔にかえたくなるでしょう。

ですから、この一寸法師のお医者さんは、しぜんと悪人とつきあうようになり、さいごには、怪人二十面相の手下になってしまったのです。めざす宝石や美術品をもっている人の一家を、みんな、にせものにかえてしまうという思いきったやりかたは、おそらく二十面相が考えたのでしよう。

まず、その人によく似た人間をさがしだして、人間改造術のふしぎを見せて、ときつけないのです。有名な宝石商や美術店の主人や家族になれるのですから、すこしでも悪い心のあるやつなら、だれもいやとはいわないでしょう。手術にとりかかるまえに、まず、あら

ゆる角度からとった、ほんものの人間の写真をあつめ、それによってロウ人形をつくり、ほんものをよく知っている人に見てもらって、なおすところはなおしたうえ、いよいよ人間改造術にとりかかるとのことです。もともと、からだや顔のいた人間に手術をほどこすのですから、できあがった人が、そっくりおなじに見えるのも、ふしぎではありません。

二十面相は美術愛好家です。ですから、さいわいにも、宝石や美術品をぬすむためだけに、人間改造術を使ったので、ひじょうに大きな害はなかったのですが、この術は、使いかたによつては、世界を一大動乱にみちびき、核戦争をおっばじめさせることだって、できないことはないのです。たとえば、ある国の最高の地位の人や、大臣高官たちを、人間改造術によつて、悪人の手下と入れかえてしまったら、どんなことになるでしょうか。

それを一つの国だけでなく、いくつもの大国にほどこしたら、どんなことになるでしょうか。世界を一大動乱にまきこむことは、わけはないのです。核戦争は、その持ち場についている、たったひとりの人間の、ちよつとした思いちがいや、ボタンのおしまちがいからでも、おこりうると思います。そうだとすれば、たったひとりの改造人間をつくれれば、核戦争をおこし、地球上の人類を滅亡させることだってできないことはありません。考えただけでも、身ぶるいが出ます。

二十面相が、そこまでの悪人でなかったことは、なによりのことでした。さいわいなことに、この一寸法師は気がくるったようです。もう手術をする力もないかもしれませんが、天ばつです。天が人間改造術などという、おそろしい罪をゆるさなかったのです。この男は気がいいです。しかし、ねんのために、一生がい牢獄にとじこめておかなければなりません。」

明智探偵は長い話をおわって、中村警部に目であいずをしました。すると、警部はそばにいたふたりの刑事に、なにかささやきました。

ふたりの刑事はツカツカと、前にすすみました。そして、まだニヤニヤ笑っている一寸法師にちかづくとき、いきなりカチンと手錠をはめてしまいました。一寸法師はそれでも、べつにおどろくようすはありません。

「わしをどこへつれていくのだ。ああ、わかった。王様の御殿につれていくのだな。そして、王様はわしに勲章くんしょうをくださるのだ。ありがたい、ありがたい。」
と、みようなたわごとを口ばしるのでした。これで超人ニコラ博士の事件はめでたくおわりました。

ニコラ博士にばけていた怪人二十面相と、その手下たちはとらえられ、一寸法師の気ち

がい医師も刑務所に送られ、宝石王玉村さん一家、美術店白井さん一家は、ぶじすくいだされ、盗まれた宝石などは、みんな持ち主の手にかえりました。

「こんどの事件で、いちばんの働きをしたのは、小林君だな。そして、それをたすけたのは、少年探偵団の諸君だ。」

中村警部が笑いながらいきました。

「いや、日ごろの明智先生の教えがなければ、なにもできなかつたでしょう。やっぱり先生のおかげですよ。」

小林少年が、けんそんなしていいました。それをきくと、十人の少年探偵団員が、口をそろえてさげびました。

「明智先生、ばんざあい……。」

「小林団長、ばんざあい……。」

そして、

「少年探偵団、ばんざあい……。」

青空文庫情報

底本：「超人ニコラ／大金塊」江戸川乱歩推理文庫、講談社

1988（昭和63）年10月8日第1刷発行

初出：「少年」光文社

1962（昭和37）年1月～12月

入力：sogo

校正：茅宮君子

2018年2月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

超人ニコラ

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>